



紀
世
國
名
所
圖
會
後
編



物色
 紀伊
 國
 上
 所
 圖
 會
 後
 編
 六
 冊



紀伊名所圖會

後編 六冊



遊心一草

しんぞく

てんぐつ

くわんり

てんげん

てんげん

てんげん

てんげん

てんげん

てんげん

人 喜 物 喜 人
喜 物 喜 人
喜 物 喜 人
喜 物 喜 人

同 喜 物 喜 人
喜 物 喜 人
喜 物 喜 人
喜 物 喜 人

松の集米の如く
神の如く如く如く
属の如く如く如く
及の如く如く如く
字の如く如く如く

色
本
自の如く如く如く
如の如く如く如く
如の如く如く如く

明神宗 由世宗

弘化子月

紀伊國造紀朝長

紀伊名所圖會後編卷之一

目錄 若山補遺

古印 <small>并解文</small>	山口驛圖	府城	本町御門
宇治宅子故居	惺窩翁客地	柏漬	廣小路圖
新屋酒店圖 <small>并柏漬製圖</small>	駿河屋店圖 <small>并本字饅頭</small>	納屋河岸圖	京橋
鈴木孫市故居	釘貫里	昌平河岸文	鍛冶戸
雜賀鉢	其二	學習館全圖 <small>并柳樹</small>	同夜店圖
正住寺	淡築地 <small>同圖</small>	漁者	醫學館圖
牛舌餅投圖	簾具 <small>并圖</small>	吹上古館記 <small>櫻樹</small>	緇
吹上御門邊圖	鶴溪圖 <small>并檜椿全圖</small>	扇の芝圖 <small>并文</small>	大手御門邊圖
吹上冠木御門	追廻一口圖	城池鯉圖	御舞臺
高石垣畧圖	岡口御門邊圖	和歌道 <small>并圖</small>	堂形圖

無量光寺 車坂稻荷社 并圖
 日前宮除夜詣圖 并說
 田中蜜柑市并圖
 土井呉服店圖 呉五官肖像
 熊野路一里塚
 淺草文庫

紀伊國印



此印天平二年本國の解文に押さるる三編の卷首に載るる仁壽四年の國印よりハヤ古く印中の文字も異なりハ更ニ模寫よりハ其解の逸文も因ニ下小載せて古の制度を考ふる一端とシ本書ハ東大寺の勅封庫より得たり

紀伊國司解	申天平二年收納大稅并神稅事
合七郡天平元年定大稅稻穀肆萬伍仟貳佰捌拾柒斛貳斗叁升伍合	
不動貳萬伍仟貳拾壹斛玖斗玖升柒合捌分	
動貳萬貳佰陸拾伍斛貳斗叁升柒合貳分	
粟穀叁拾斛伍升	
類稻柒萬捌仟壹佰肆拾捌束壹把陸分	
為穀古類柒仟玖佰伍拾束	
得穀柒陌玖拾伍斛	
振斛量入柒拾貳斛貳斗柒升貳合陸分	
定柒佰貳拾貳斛柒斗貳升柒合肆分	
出舉壹萬陸仟壹佰捌拾束	

身死壹佰叁人免稅叁所壹拾陸束

定納本壹萬叁所壹佰陸拾肆束

利陸所伍佰捌拾貳束

古類伍萬肆所壹拾捌束壹把陸分

合陸萬叁所柒佰陸拾肆束壹把陸分

雜用捌所陸拾束

年折白米叁佰柒拾壹斛肆斗新柒所肆佰貳拾捌束

酒米貳拾捌斛陸斗新伍佰柒拾貳束

年折外交易進上小麦陸斛 直陸拾束 一斛別一十束

遺陸萬伍所柒佰肆束壹把陸分

輸田租稻穀肆拾斛玖斗玖升柒合

全給貳所封主貳佰叁拾壹斛叁斗貳升壹合

貳分壹主給玖拾玖斛壹斗伍合伍分

納官玖拾玖斛壹斗伍合伍分

納公叁所柒佰壹拾斛伍斗柒升伍分

振斛量入叁佰叁拾柒斛叁斗貳升肆合貳分

定叁所叁佰柒拾叁斛貳斗肆升陸合叁分

依民部省天平二年八月十八日符加添輕稅錢直稻叁所

柒佰貳拾肆束柒把

都合見定稻穀肆萬玖所叁佰捌拾叁斛貳斗捌合柒分

不動貳萬伍所貳拾壹斛玖斗玖升柒合捌分

動貳萬肆所叁佰陸拾壹斛貳斗壹升玖分

粟穀叁拾斛伍升

類稻陸萬玖所肆佰貳拾捌束捌把陸分

酒伍斛陸斗

清四斛
洋一斛六斗

正倉改拾間

空七間 借納郡稻一十間
借納官奴婢食料稅四間

借納公用稻一間 借納義倉粟二間

穀倉肆拾間

不動一十九間
動十一間

粟穀倉壹間

類倉貳拾肆間

鎰壹拾伍勾

不動六勾
動九勾

軍團輪

此等團和除木麻郡未平二率
天平元年定輪壹伯玖拾壹斛捌斗貳升壹合

以下畧

志願(也)神代の(り)れ
あゝあゝ(と)思(は)せ
た(ら)ん(と)思(は)す

加納諸平

齋部宿松孝秀書

山口驛より遙く
御城を望む圖

家集

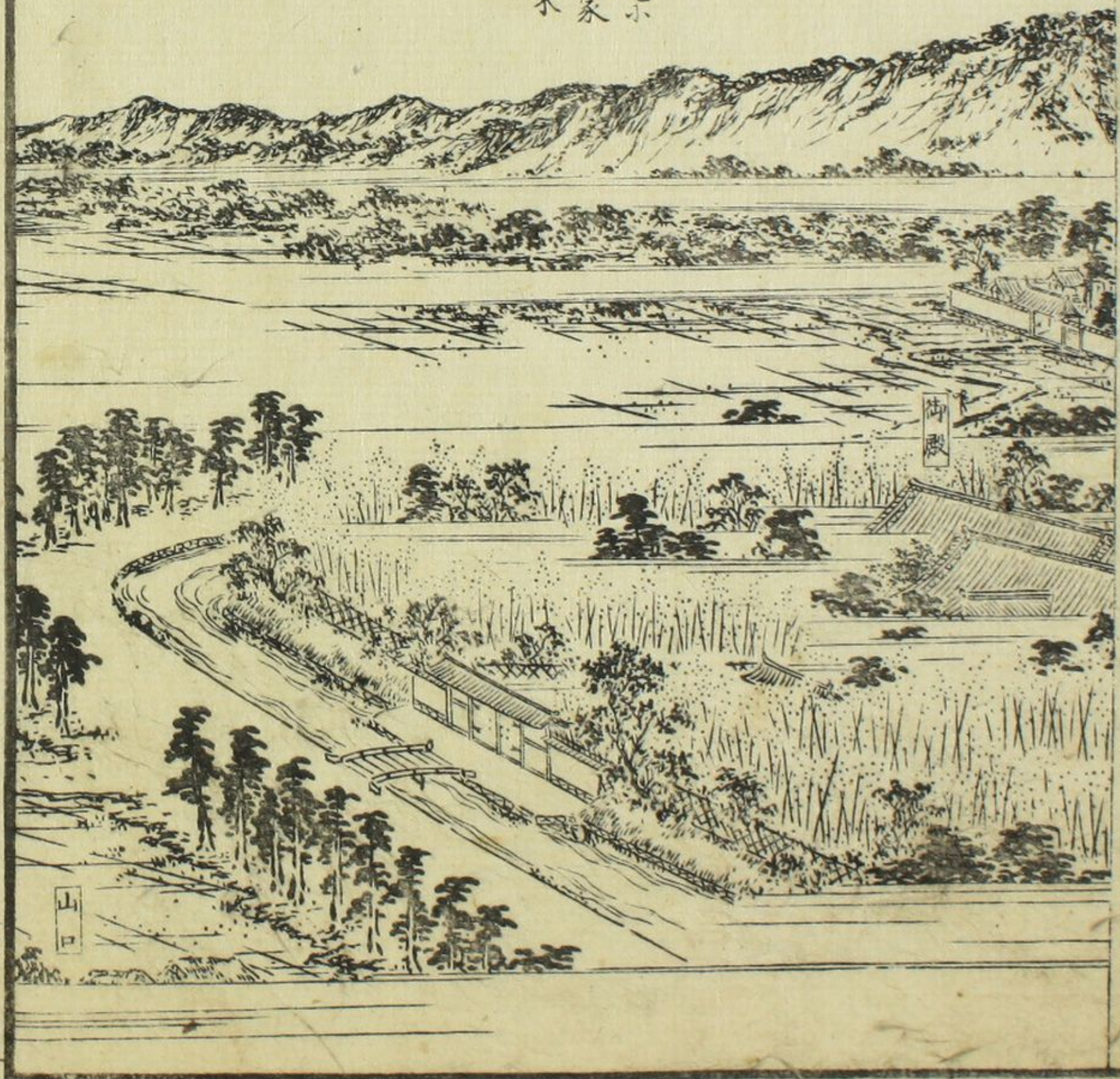
天和二年の冬
將軍家の御使の御迎ふ
山口といふ所（物）て田家
いやりををるに庭の木
るより月をみく

一萩のれ田中の庵乃

さのいさよまお
た

床は月よりあふ

源朝臣令細



幾樹青松夾路堆
遙看城堞樹間開
沙川溶漾人呼渡
此水知從芳野來
頼山陽

萩園家集

山口峠より

雄の山代

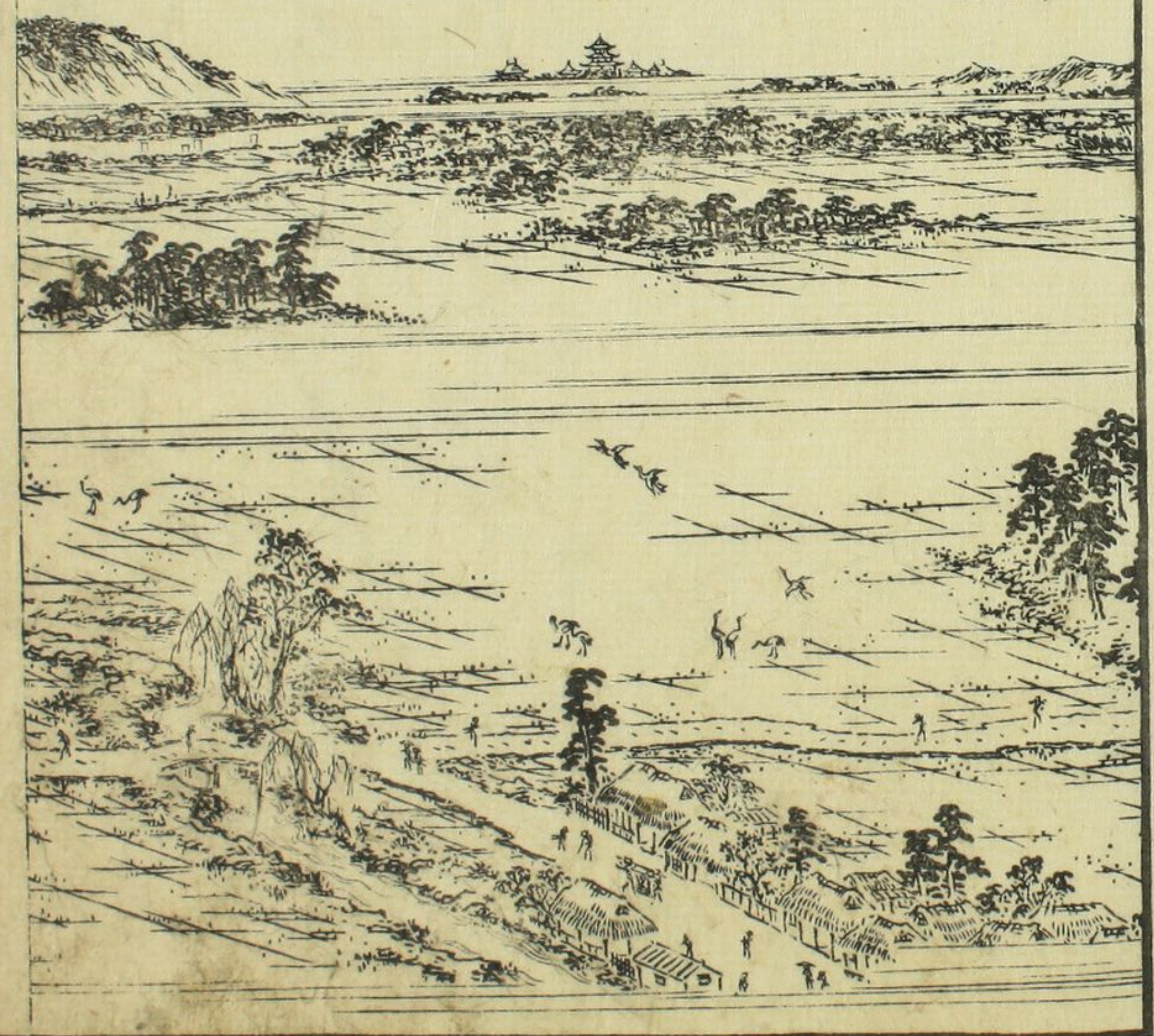
此木の園を

東のや

志の朝廷代

とわに御まもを

夏目鷹磨



紀伊國名所圖會後編卷之一

若山部補遺

府城

若山中央小天律きらて樓閣うねり邪糸日曜き
三層四層の殿造利麗いやうふ〜大城のうを紀伊と
伊勢との二國を覆り四面内廓ハ八重垣をわ〜岡山南
ア所らかして本陣ふ松の木立翁鬱〜或ハ龍の蟠れ
るやぬ或ハ虎踞まき〜如一本川とほ〜久く東より流
きや〜流りて儒文機の帯と尺く長峯北山ハ新面に雪
なむり背面より列して遠き沖楯と仕奉り那賀名草の田面
千代八千代を一目も尺渡され〜電の煙賑〜古昔羽柴氏代榮
〜より涉野氏の財を獲て元和の以降更ハ内外の廓と殿に
備りつ〜城隍水常〜港〜糸世も易ふ〜比鎮とるれハ

誰より作りき尊とるれ

活所遺業

九月八日陪前法親王於紀州城樓 那波道四

風迤重陽和且柔青雲高客上城樓南州海嶽隨看
在自是應名多景樓

扈從上城樓

菊地衝岳

宗室藩封跨二州三層突聳鎮城樓勢南表裏山河
色紀水迢遙海嶽秋天險寧論吳子對雄風欲賦楚

王遊追隨遠指 高陵樹瑞靄氤氳繞玉洲

雨餘草色夏夜當直城樓之韻 竹村菽者
動雲晴林上挂香浮清風偶攀天半樓月掛嶺頭蟾影
占秋窓對葛城情自逸戶舍紀水望愈悠柳堤陰步
去來客兼者留連速近舟世上塵喧堪可謝人間富
貴復何求習家醉飲尋豪趣河朔涼筵結雅遊不識
誰家絃管起依稀使我在瀛州 伊藤善話
宗藩治國紀候謹賦拙詩一章 洽民况有遺文常社
席進修祗識逐年新奕世思光澤

殿の御前みまへまさしく古語拾遺こごごをよみて申まをふり
日前ひまへ大神かみかみの御みまへ所ところをよみて申まをふり
うしこけきとおもひつゝなまのりまふ 本居宣長
朝あそより此こゝの大神かみかみ能よく殿みまへ乃すなはち大神かみかみの神代かみかみ能よく道みちをね
まゐるゝ尋たづね給たまふと其その御みまへ書かきあはれり給たまふ心こゝろはあやう
きき大神かみかみをりてのまもりておのり日ひの守護まもり者ものと
よまきり給たまふ大神かみかみの守護まもり者ものと日ひの守護まもり
り給たまふに守まもり給たまふ國くにに大おほ河か後ご威いの光ひかり四よ面めんに
いさくふもく照て給たまひりやき給たまふ萬よろ世よいやき長ながく度た
アヤウあやうとさるゝえさるゝ殿みまへの御みまへ世よもや

本町御門

府下の入口より御門より内を本町といふ元和
年中京橋御門のやう通衢を用きて本町寺

庚寅元日 南紀作

那波木菴

新年何所好 白日已徐長 酒宿北京客 梅飄南國香

江山催淑氣 氷雪逼青陽 莫謂非吾土 委身是故郷

元日の初世のいひこゝして大平の我の茶をまじめて
君のまじり名もあはれさるゝのまあをまじりしうれき千世
のいひこゝれとよろろよほきて我もまじりし

本居宣長

くじり今年をりし初はつと名なも若わかし里さとのわ水

宇治

本町の東にあるを東宇治
と西にあるを西宇治とす

宇治の名日本紀みこに紀直祖みち免道みち彦ひこ雲異記うゑ小宇治こ大伴連おほ小
の名皆此地名より出て上古こゝろに此邊こゝの總名ななりなり後世のち分
れて鷺森さぎ七日市にち六日市むか三日市みかなり釘貫くわ徳田とく木四日
市等しの小名な河かなり
ひし 佐武伊賀守といふ人あり其父を元昌といふ
室町家なり永祿年中軍功ありて鷺森釘貫
の地二十石
賜ふといひ慶長けい結むすぶ宇治村う鷺森村さと二村ふたなりなり其後
府下ふ小属こ二村ふたれ地ちを割わて内町うちを商戸しょうと宇治うを
士邸しなり

日本靈異記云

大花上おほ大部屋た柵野さ古連こ公者こう紀伊國き名草な郡宇治ぐん

大伴連公先祖也天年澄情尊重三寶案本記曰敏
達天皇代和泉國海中有樂器之音聲如笛箏琴笙
篳等聲或如雷振動晝鳴夜耀指東而流大部屋栖
古連公聞奏天皇嘿然不信更奏皇后聞之詔連公
曰汝往看之奉詔往看實如聞有當霹靂之楠矣還
上奏之以下畧之

節婦宅子故居

其地今詳なきはとて
宇治大伴氏の因に載す

三代實錄云

貞觀六年八月十三日節婦紀伊國名草郡

大伴連宅子叙位二階免戶内田租表其門閭以旗貞節

惺窩先生客居地

今詳なきは本國事
跡傳りて借むる

文集行狀云

慶長十一年先生赴南紀蓋太守淺野幸長

招之也其所待尤謹弱浦有管神廟太守請先生誌

其碑銘又為太守抄經書要語三十件許添倭字之

註解為一小冊便于冥諸備於顧諟是為政之存心

資治之守約也太守甚喜此時元古栢允從行戶田

帶刀為春永原松雪等屢來訊請先生講古文真寶

其以太守眈眈渥厚故遊于紀冬往春還者有年

舉自集 妙壽院紀伊國趣路の比きける 木下長爾

名跡にもあつたりあはれおのぬまの濱は妙日

秋霧の立ちしれいと思ふまゝにわてつゝる心地こそあれ

妙壽院ハ即惺窩先生より同集又錢家の文を載り今畧す文の末
都より移りてきてさの此の園を人合とて等々の歌あり

産物粕漬

本町五丁目新屋より製す初るりの小西瓜茄子瓜の殻を家職の

粕漬といふ本國ハ暖地よりて菜蔬の生立もよくて惣て絶品を撰ぶを

以て其製他小勝もいふ故小本國ハさきもいふす京大坂等ハ日毎運送

江戸まで珠り賞して直は新屋漬といふ此製いつれは専らなれり也近こ

三年宅を分ちて若山居一せく造酒を業といふ室曆四年の冬府下某侯より京

五条家より家職を呈し独つる小賞しをいひて菊のいふ銘を賜ひて

山川の葉のいふ水いふをいふれて人の老をさく花舞といふ古歌の懐紙を

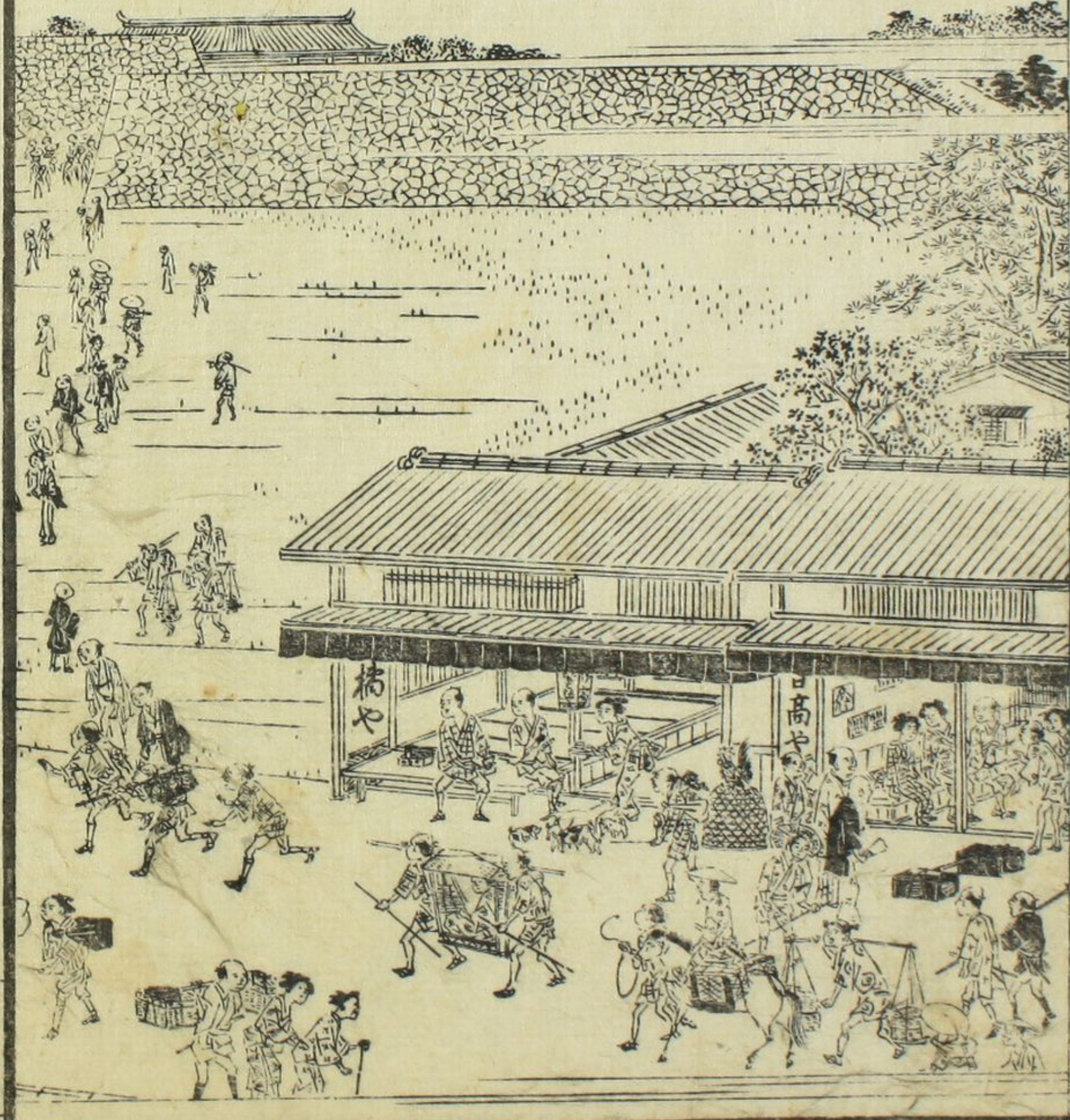
傳へる今より其製を

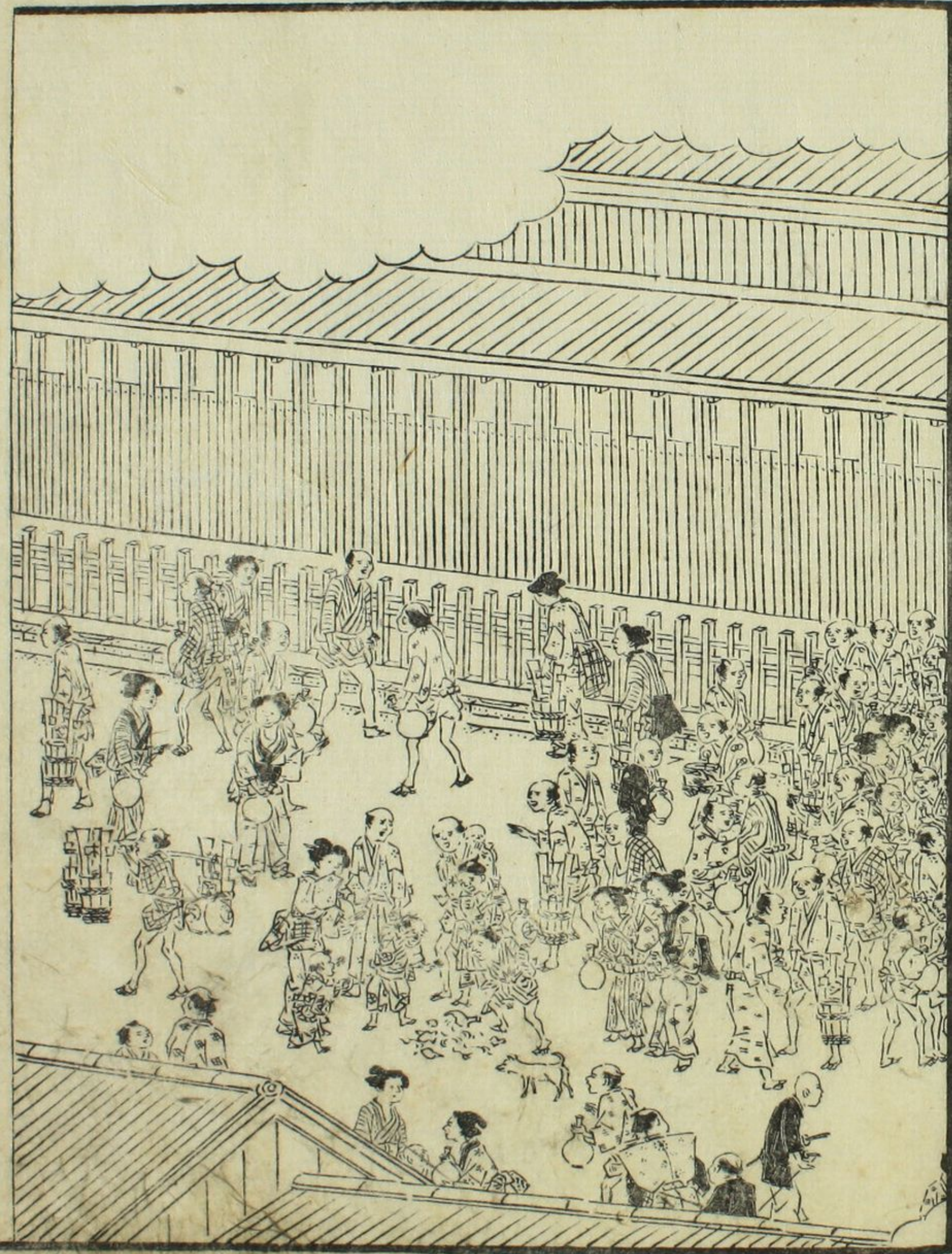
傳へる名品とす

辛寅元日
 一任年々
 白髮新
 傍花隨柳
 養吾真
 南州民物
 百應喜
 和暖先占
 天下春
 李立卓



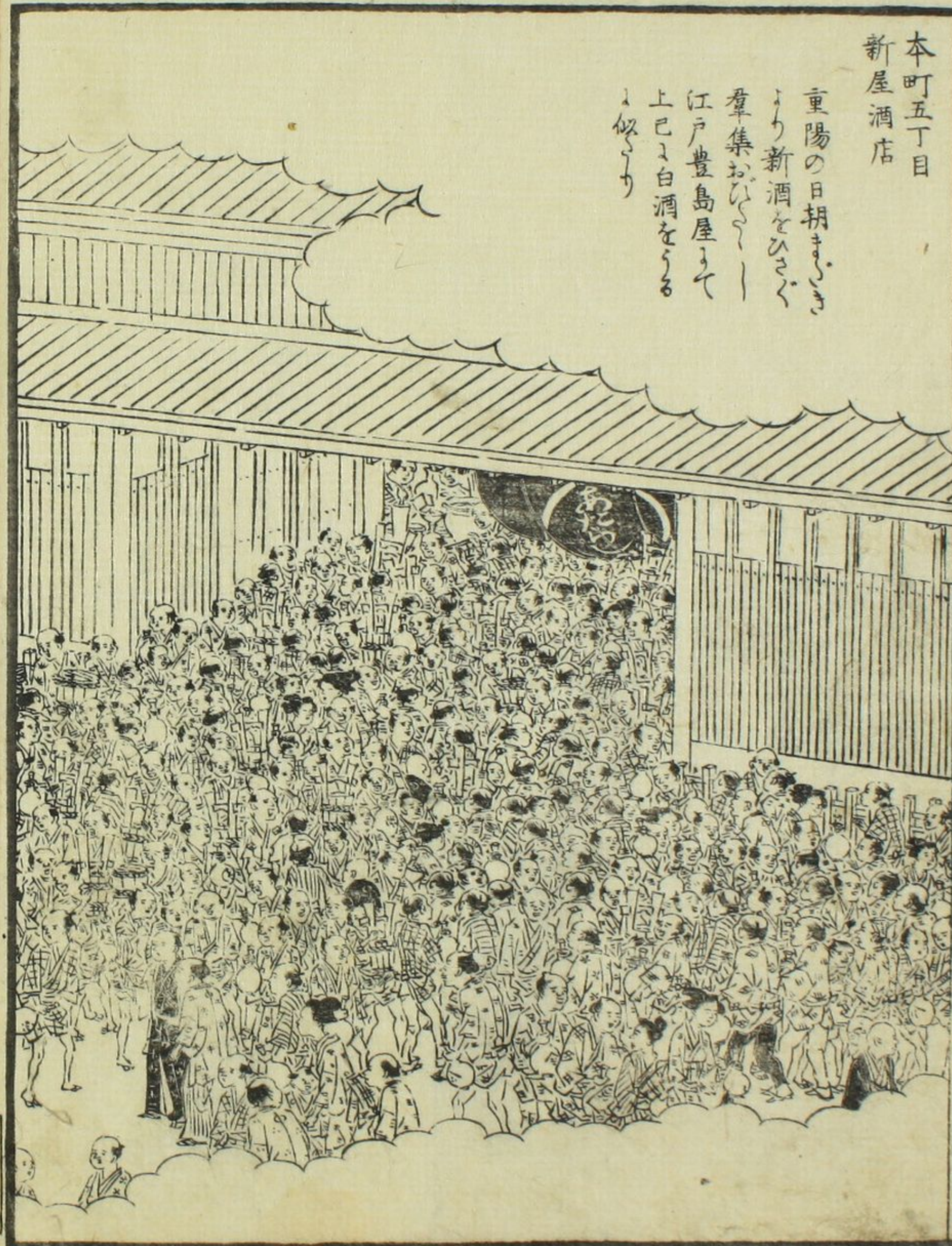
本町御門の外
 廣小路の盡

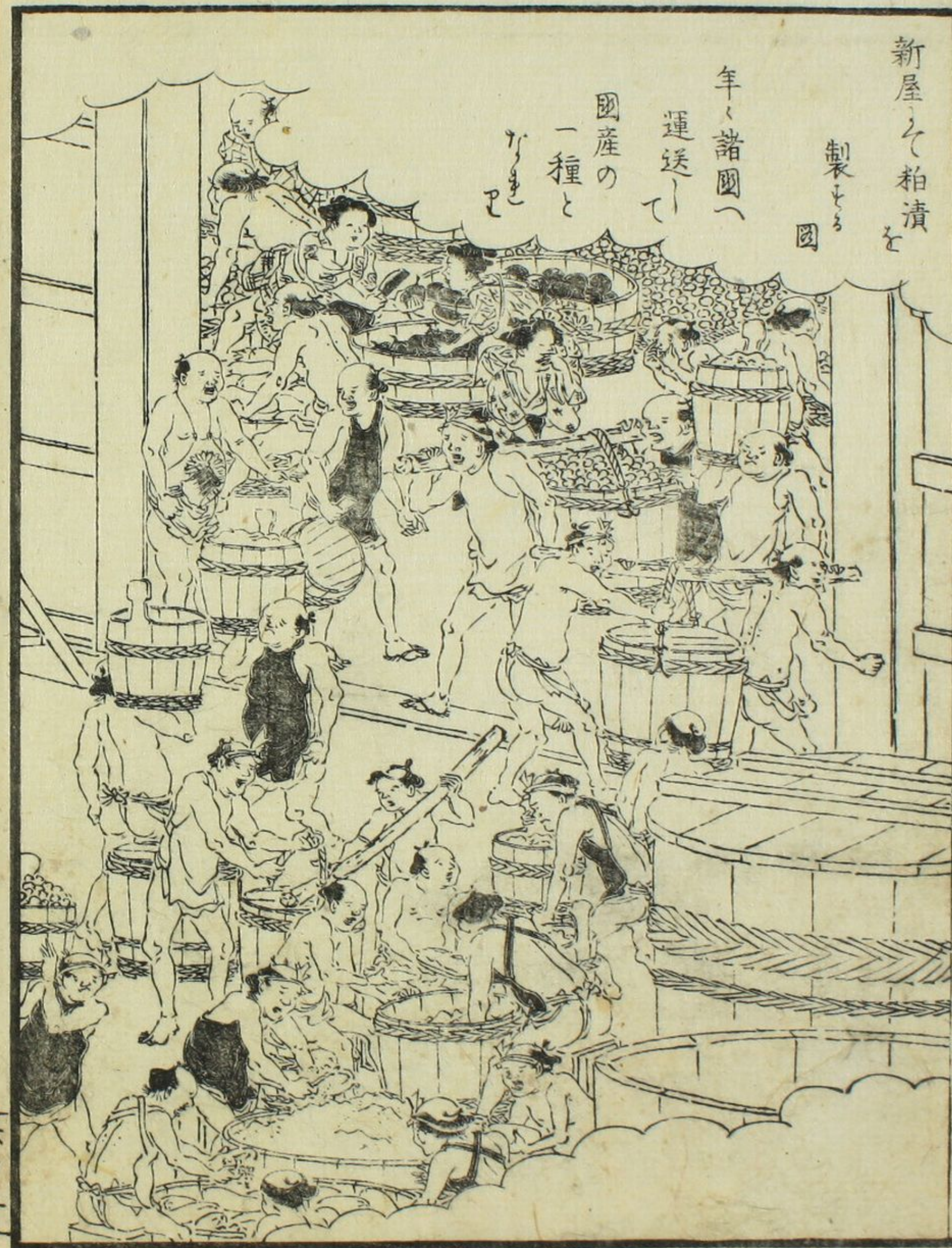
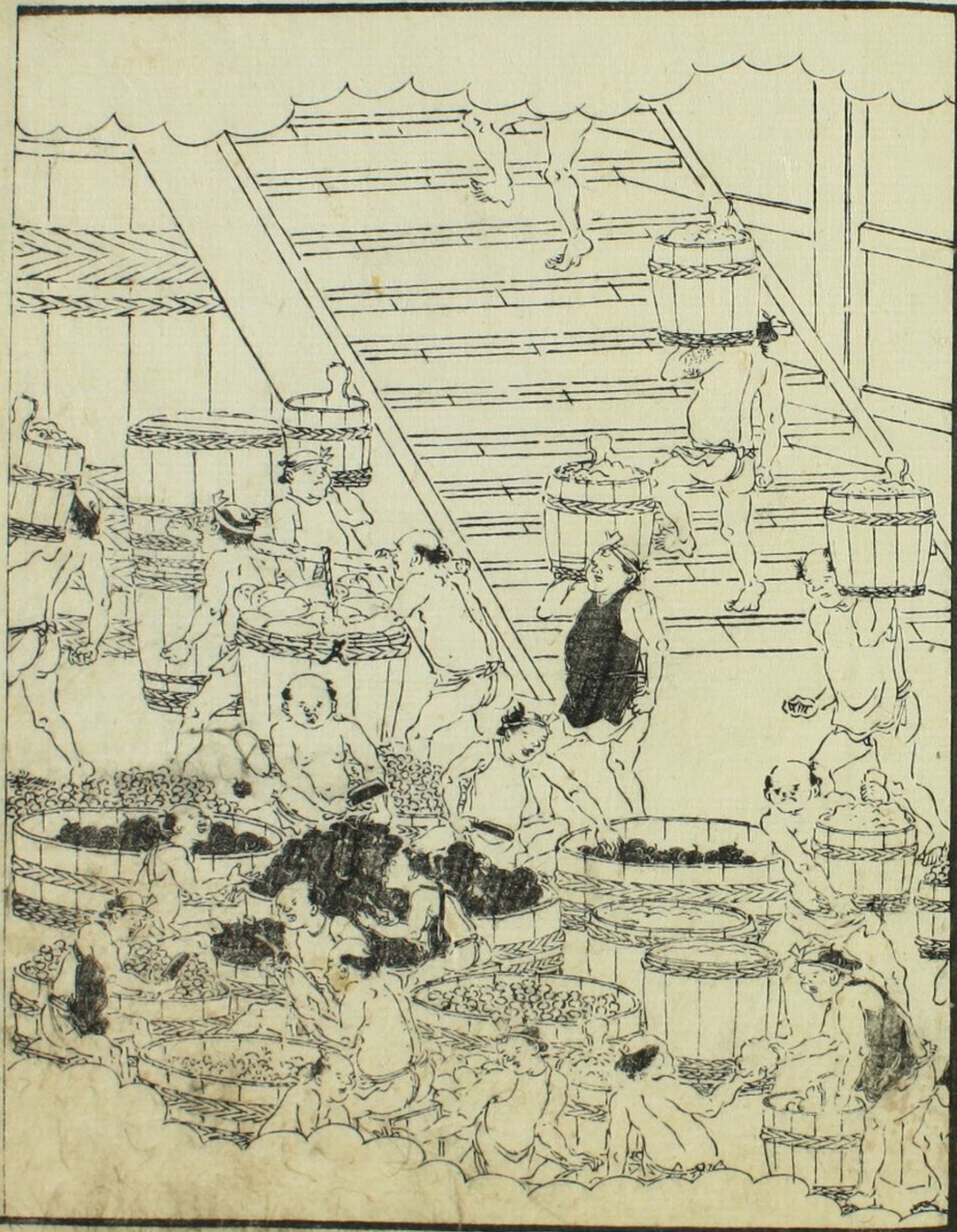


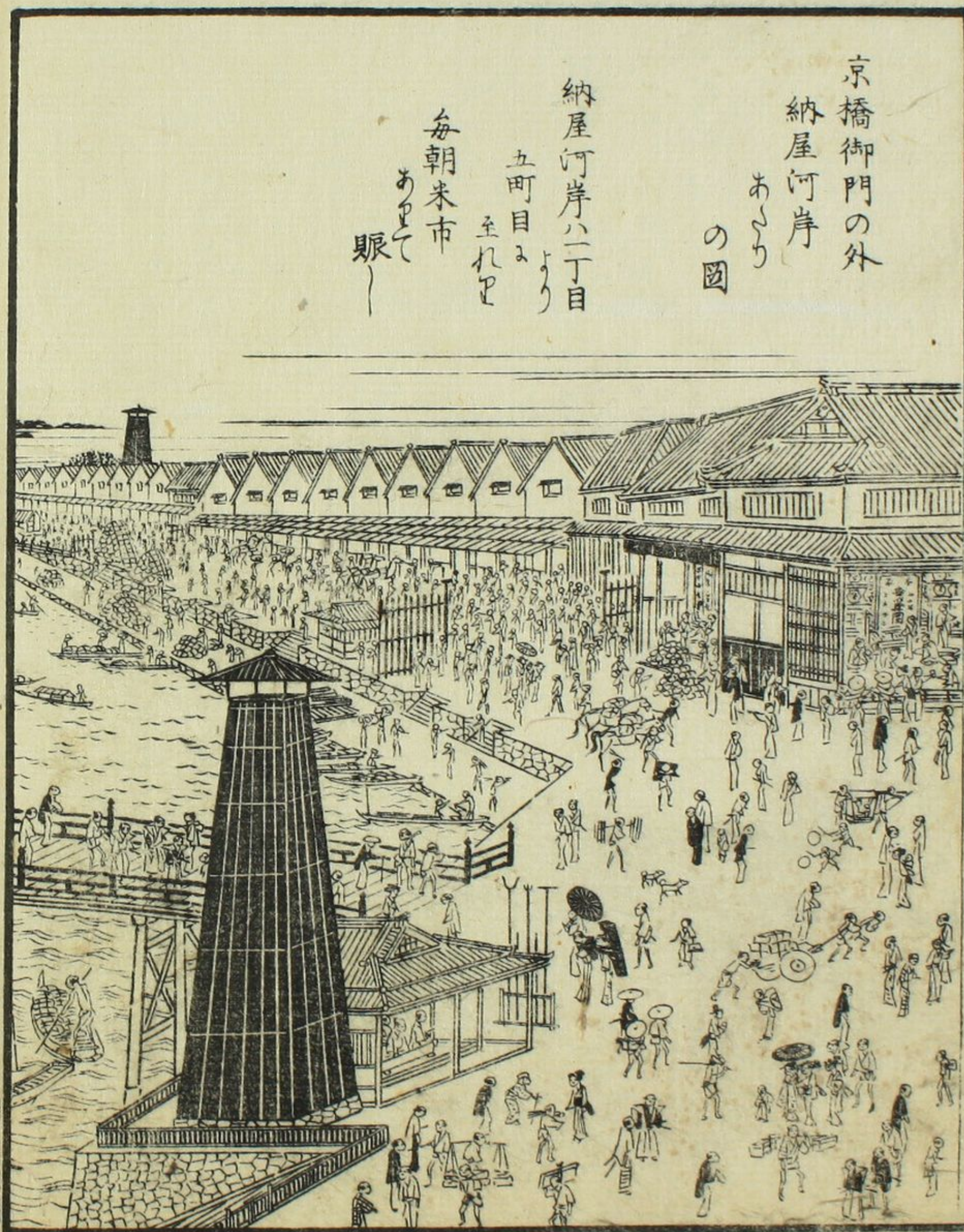
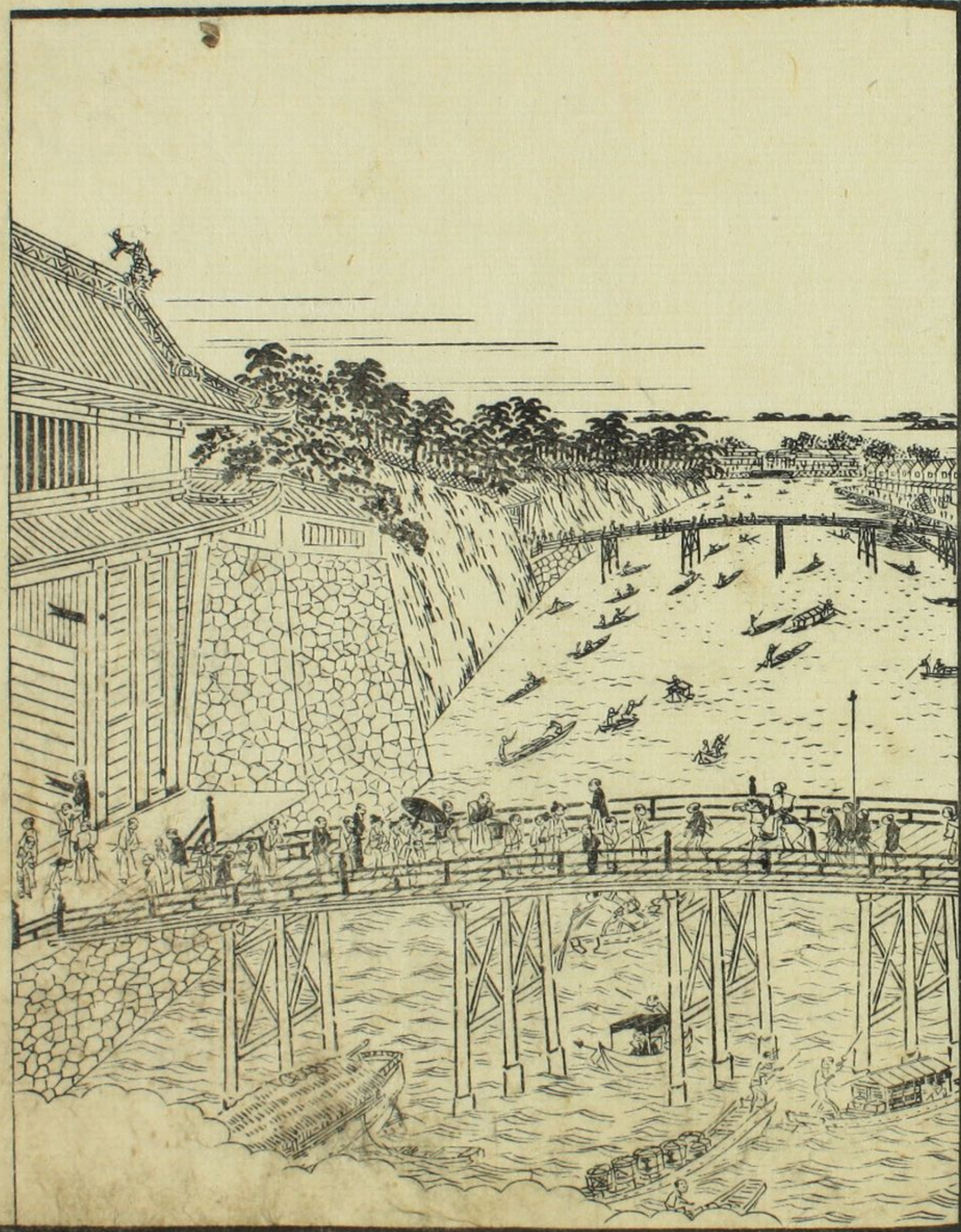


本町五丁目
新屋酒店

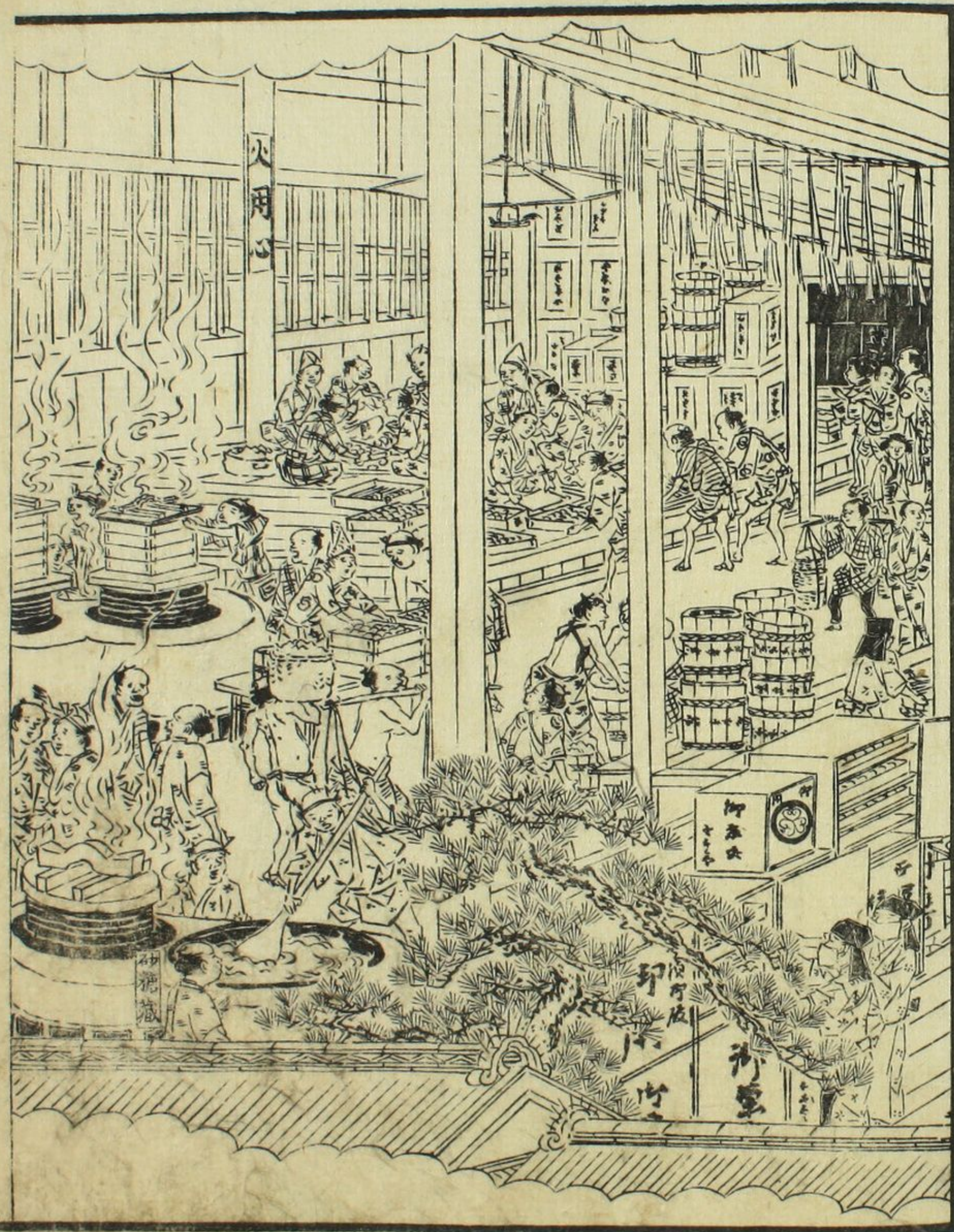
重陽の日朝まじき
より新酒をひさぐ
羣集おびびり
江戸豊島屋にて
上巳の白酒をうる
いゆる







京橋御門の外
 納屋河岸
 あらり
 の圖
 納屋河岸二丁目
 五町目
 至れど
 毎朝米市
 あらり
 賑



納屋河岸 京橋御門の外東西

京橋 本町一町目の河岸御門の前面

京橋御門 内郭の正面の御門をいふ

鈴木孫市故居 京橋御門の東川に傍て雑賀町あり此地に住て其世

高し其喬今水府

産物本字饅頭 駿河町駿河屋にて製ら當家氏を固本といふ其

傳之搦紳家調進を慶長元和の比屢命ありて駿河國

轉居又若山小出店を其後京大坂南都名古屋より出店し今

六箇所に分れて同製を齎ぐ天明四年より伏見の店小出俵を賜

ひて今小及び台命の故を以て伏見を本店といふも若山の此店官用施

向なりれハ尤盛なり屋号ありて露屋といふ

高貴の名に憚る事ありて今号ありてむ



菓子形數千品ありていへも本字の
焼印あるを慶元以前より形のり
との焼饅頭の始りるを

鍛冶戸 本國鍛冶の事古書に見ゆるを因らる

鍛冶戸紀伊國十三畑右鍛冶戸毎年當國計帳進

官官先下主計寮全計損益然後下寮即從十月一

日至二月三十日爲番役使

九五畿内中畧 紀伊等國鍛冶戸百姓調庸係分者附

貢調送之

養老六年三月紀伊國韓鍛冶杭田鎧作名床等合

七十一戸雖姓涉雜工而尋要本源元來不預雜戸

之邑因除其号並從公戸

雜賀鉢 曹小雜賀鉢といふがあり雜賀ハ本國のありき地名を是で名草

海部二郡よりわかれる雜賀莊の内より制をいふや今作らる

釘貫里 府城の北今内郭とされる地を舊釘貫村といひて天正年

北町といふ釘貫の名木二の具の釘技より起る事ありて其地も関塞とありて

古書小冊をくむる事ありて及て此地も関塞とありて

や 浅聖氏の文書
釘貫氏も及ゆ

昌平河岸

湊の地東の岸町より南北に通ずもと湊片原といふ文
化年中今此名小改め文政年中かろく三町とい外隍小添へる
岸側寄合橋の詰よぞ干店を
建り夜店ありてと賑い
柳園文集

昌平河岸納涼記

山丘を勢をうへく市を跨りうへくあつた御りもさ六月
より暑き六困してゆつてうへく昌平河岸はささるるあつた
ま此頃を知るもさぬもお節のやゆきうへく人遊るも好く立
接てお今下垂るる太刀の決むるやふる袖は透れ堅魚うる海士
を老法師の袈裟をうへく破りてそ走る蟬の羽おひらるるあつた
歌流のうへくうへくおひらるるあつた肉を煮るにうへくうへく
我は顔るる相撲人も暫くうへくうへくうへくうへくうへくうへく
おへくうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへく
方日群居て賣る種は目うへくうへくうへくうへくうへくうへく

とる煙のあおれを當りりきもえははし橋をぬ追風とて葉を
きて夏瘦ふうへくうへく物をもて運ぶは果飯を世の溜る海に
夏の花形しる菓子も粒塵を居るうへくうへくうへくうへく
これと海をうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへく
弱肩うへくうへくうへく掛て耳高うへくうへくうへくうへく
あつた人の園は勝れる味を誇り醜漏る六月七といふこ記
御膳毎海ふとくうへくうへくうへくうへくうへくうへく
一粒とてい其鮎真真うへくうへくうへくうへくうへく
かより海の老れ若うへくうへくうへくうへくうへくうへく
なしてうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへく
ふを侍も動きうへくうへくうへくうへくうへくうへく
うへくうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへく
菓子齋くうへくうへくうへくうへくうへくうへくうへく

了りし時川道途してらりきく後棹きりしきと乳
り居て後よものきりやあれ味と獨らつたりしは風
を立れ雲を以ておろして教をぬ菓をぬも高きはら
り付れは月の如く臨時の神樂あてて才の男と女と給あ
らうあはれいぬし記さあおりの出るる那と傍のこ海
おろしはらきさいはつてては河原より出はらせしむ
甲の殿を造りおわては百機の手も玉とくもに寄る婢女お
とも唐錦を装い流の籠るを金枝枝の白銀の花咲きへく
足れくはらる所よりはさしはいつとくれくも産里れがめは
もあはれいぬしはらきさいはつてては河原より出はらせしむ
此家居るは家系くのみ成るをりて一向よりくはらこい
と怪しと打傾きつは方を足付れは第星送るまきと歌
くくつはらこいをくくはらこいしてさあ我も長居とて退く

橋新欄干より星ゆもる天文博士句詩誦どは文章生或
は呉竹まらり記しをいれ芳野河を引く恨あはるも多りや
水以風漕けをれる小舟に隙に架通ひて月もや更ぬれと
學院乃柳の蔭を於暗の夜頃

柳樹 正徳年中國校を建一時岩橋景淳館内極りの数年をへて繁茂を
詳風雅集に見えし其後数年
を歴て館の外より益繁茂あり

詠學館柳首

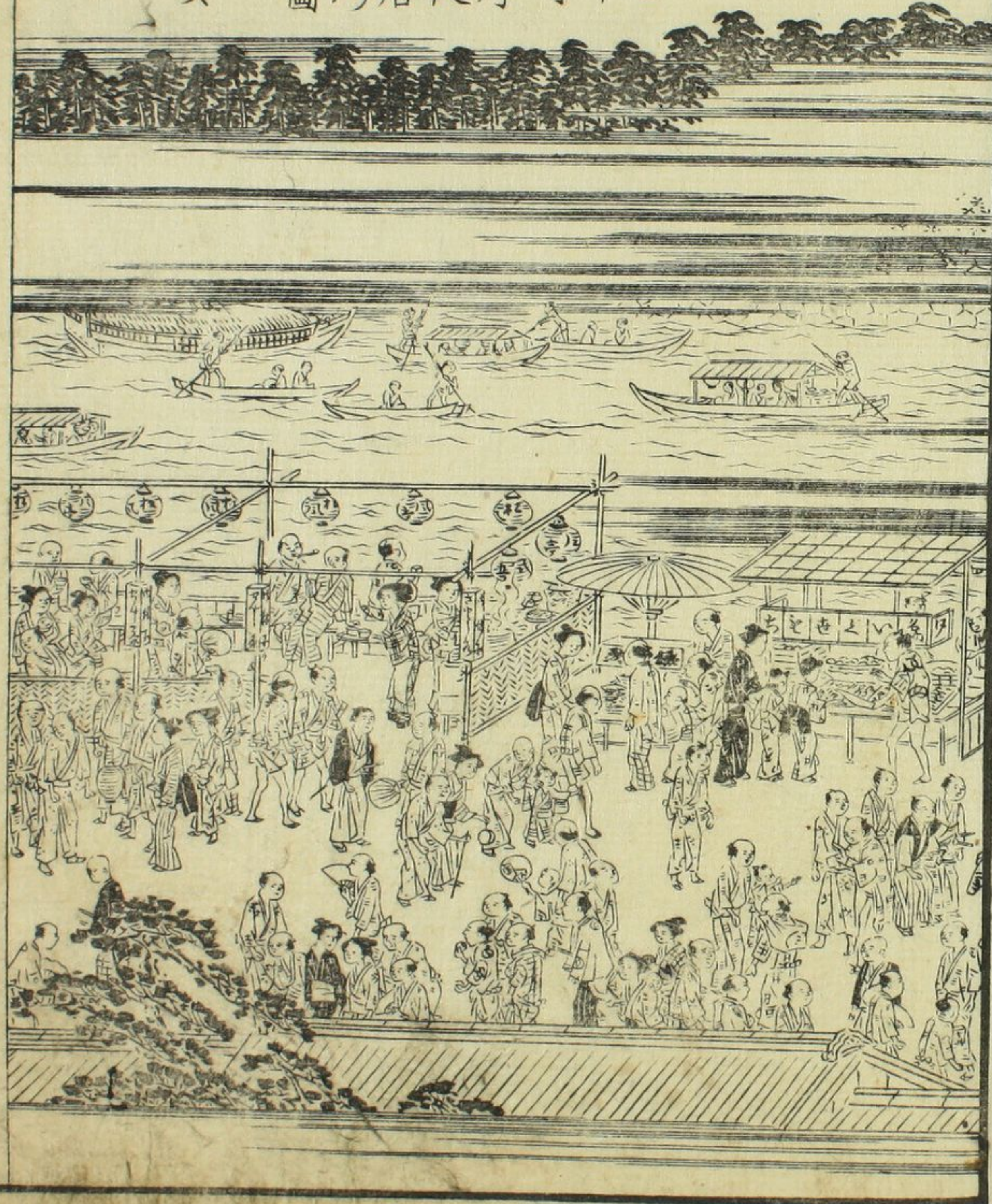
岩橋景淳

不映歌樓上手移講館旁託根能得所一段發春光
非是隨堤種垂枝欲掃塵託根能得所迎送讀書人
適有播紳客眼青弄翠煙託根能得所幾費好詩篇
託根能得所風外捲金絲賴免他人折未知離別悲
託根能得所萬縷影重重相對綠陰底使人輒歛容

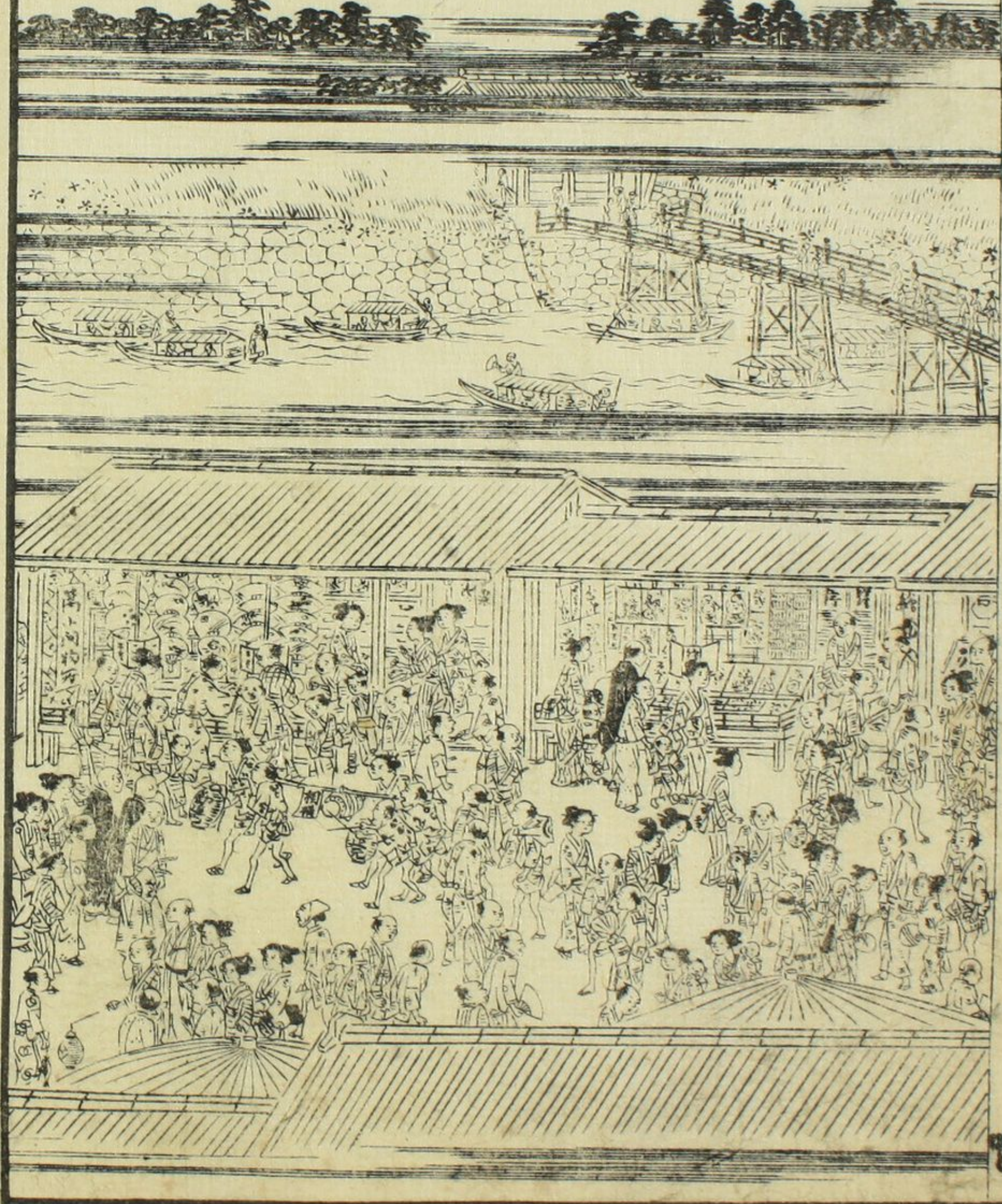
詔賢山正住寺

東長町あり法華宗一致流京妙覺寺に屬し旧ハ真言宗
なり小文明年中妙覺寺真如院に住再興して改宗ハ

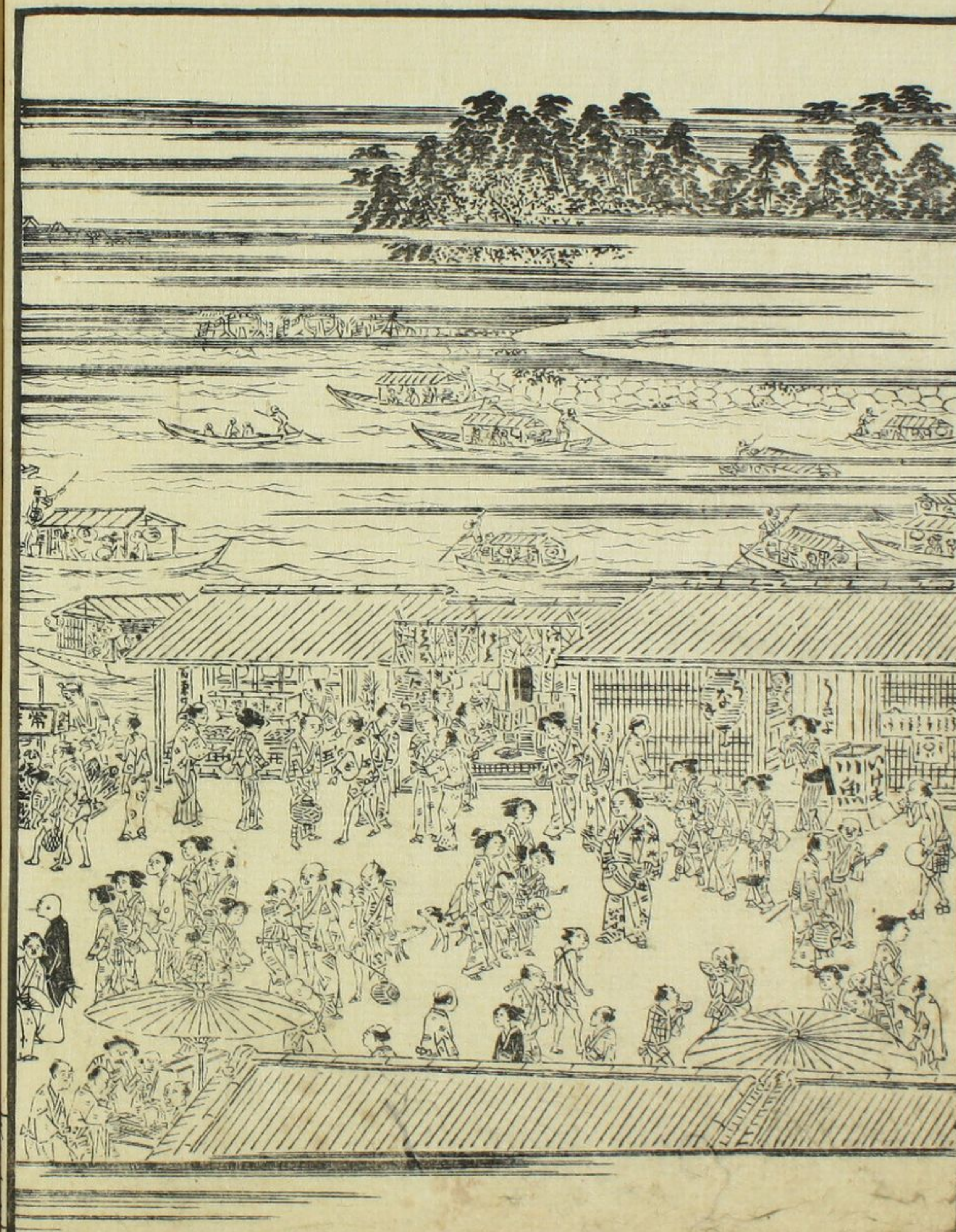
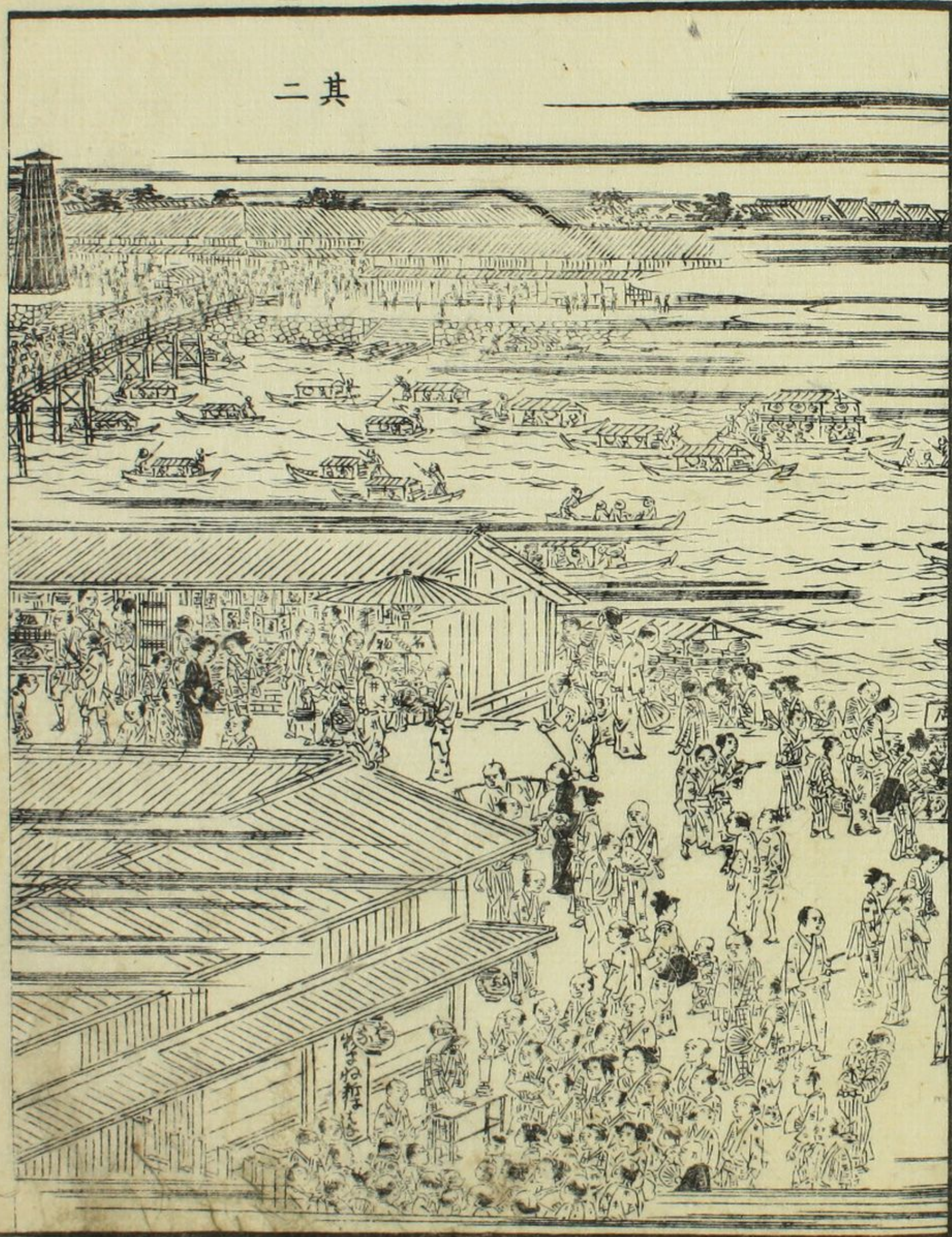
昌平河夜店圖 其一

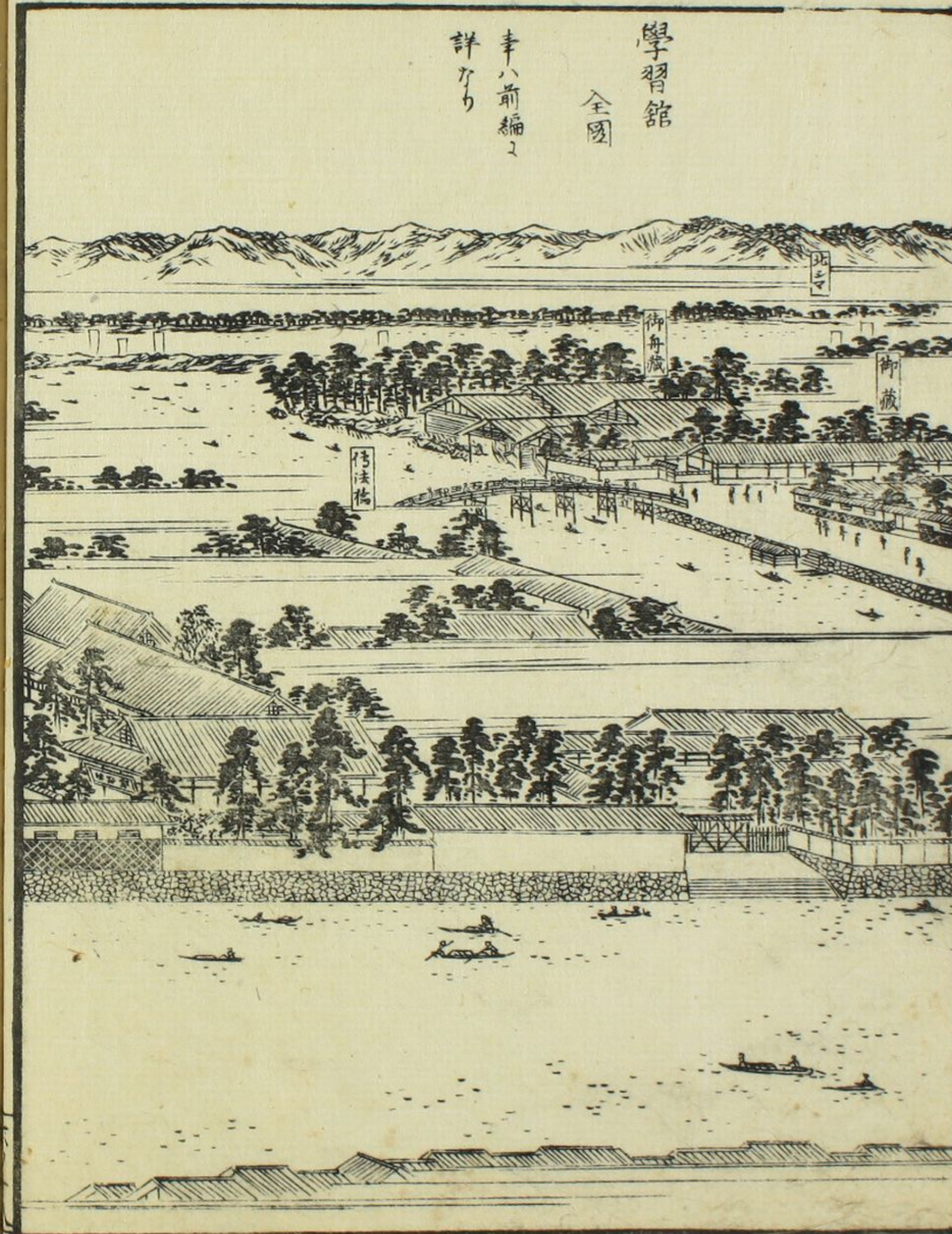
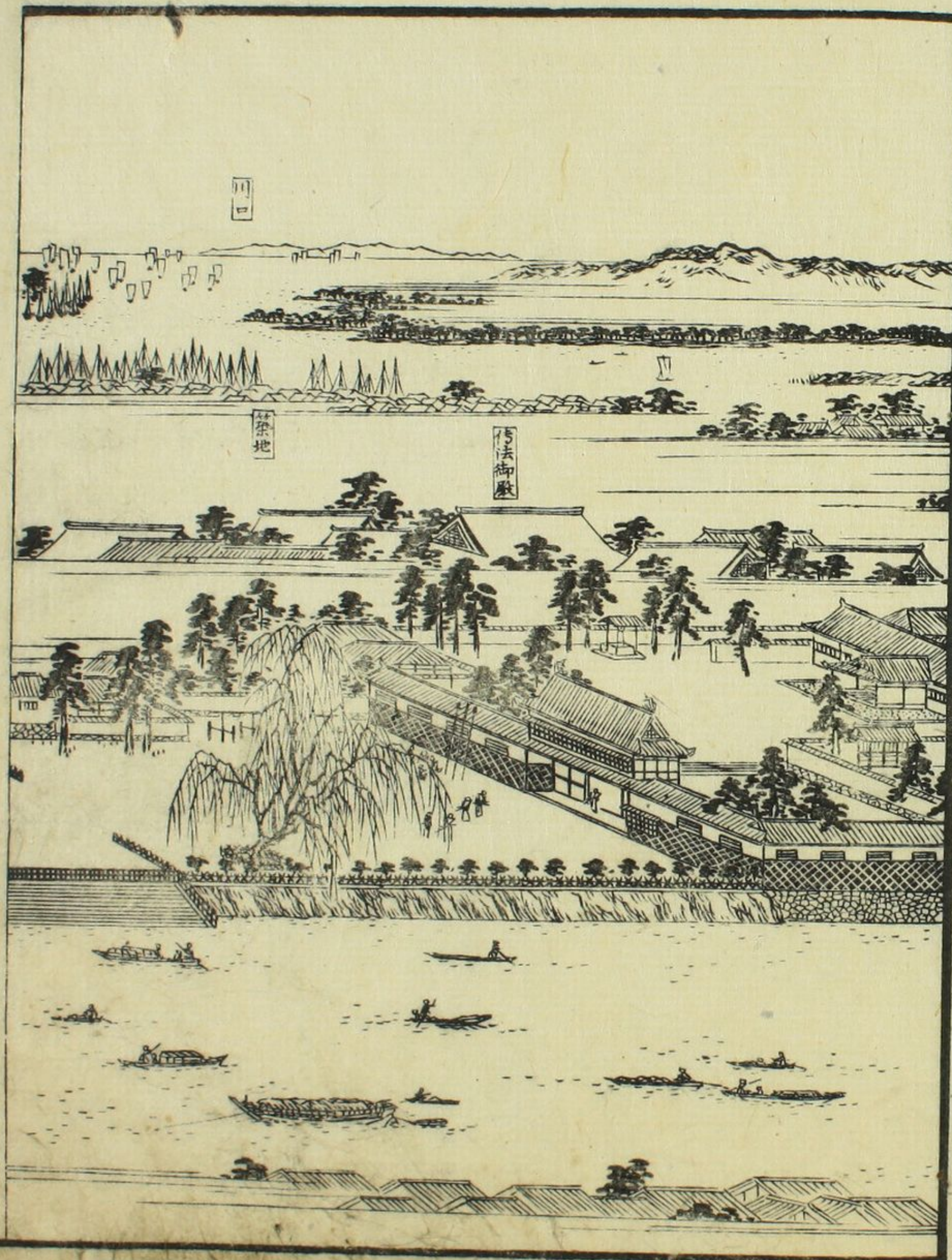


湊橋御門

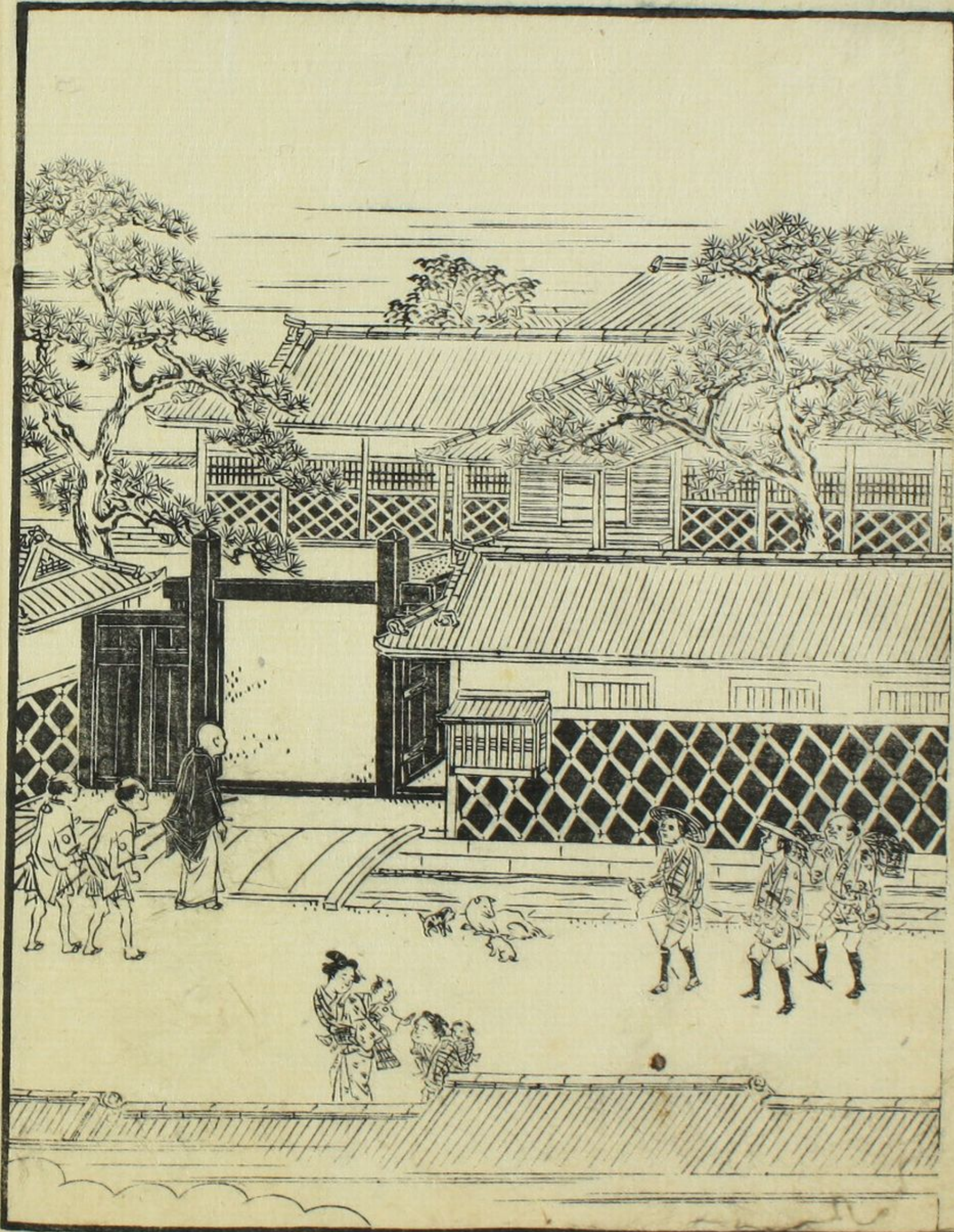


二其





醫學館
寛政四年四月十八日
官命ありて
創設せり恒
例二月十七日
神農祭春秋
ノ物産をわ
る其地行事
畧し



寺曰湊魚店あり慶長年中
元寺町寛永年中今の地に移り

力士蓮井象之助碑

寺内あり象之助八寛永年間の人にて身長七尺の
過く碑の高ハ其長比しく作るといふ又平生佩る所
の雙刀あり大刀ハ身長四尺五寸中心
一尺五寸小刀ハ三尺餘也銘ハ元載す

江州淺井郡之産蓮井象之助鬼勝行年二□九身長

七尺強臂力過人又能相撲無有與此敵者頃年来

在紀州一時使良冶鑄所自佩之刀勢如長戟鬼勝

揮之擊之其易如轉骰子不亦快乎實可謂希世之

巨力奇代之大男子者也於南紀肥前守藤原鎮忠

造寛永丁丑十四年八月

湊築地

川口あり南ハ大雁木の波塘
より北ハ城山の波塘迄の間をいふ

天保七年五穀熟らば翌年に至り米價もしく高直して

賤民餓え及ぶ者多し加之疫癘流行し道路に倒る者亦も

サ々れを官此を憂ひて茅舎を建て病を療せり或ハ巷

衢の便より粥を施すといへも窮民於施されも更も川が

らへの舉あり折海路の運送年々小繁く川口塵埃に埋れて

淵も瀬も變り通船此便宜より其窮民をして土砂を堀

と地を築き其用度を與へて餓を救ふ此舉五月中

旬より始めて九月上旬小至り人数ハ老若男女も一萬日數千

人より及一里築地の廣袤南北八町許東西一町を代もや

いとも名海潮の衝る所なり水底の淺深定むるも役民多

くハ氣力微して脛弱れハ土砂は運もろくも難ねと多勞

かるを以て遂に其功就きり實に救荒此大舉といふ處

る此もつら彫く宅を築き魚市此場より運送も以て

倍を築

漁者

湊上町網屋町材木町植松町の四町を漁夫
多し因り上古海部の大捕を充り載す

應神天皇の御世海人部を定め大濱宿祢を海人の宰と

湊築地の景

御船蔵の園

南紀風雅集

正月陪

國君駕船春遊

遊賞不辭垂夕暉

童冠醉舞者春衣

田有南海足歡樂

萬里風帆自在飛

那波道田

天津雁杖

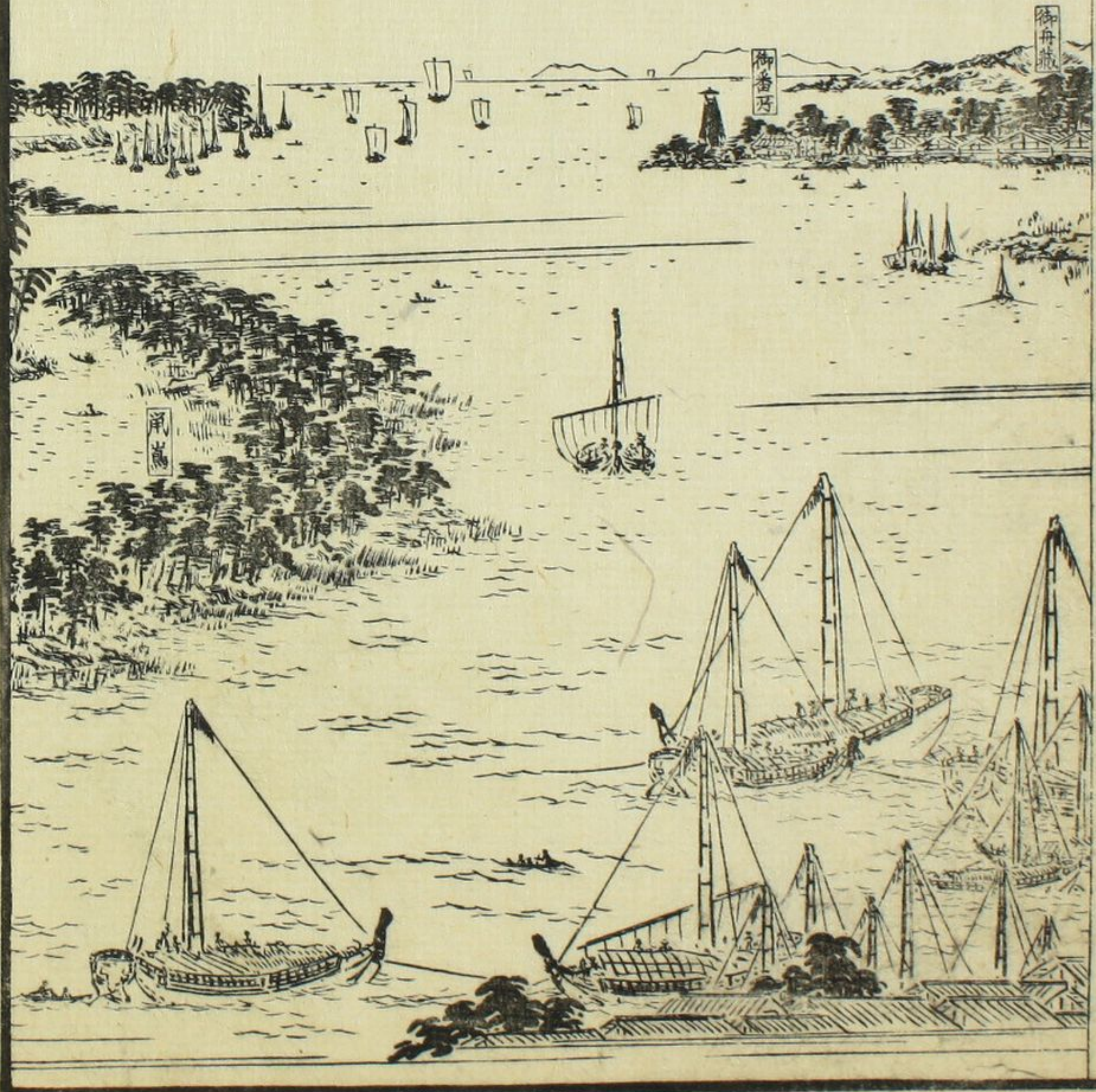
南まきれ

海方

浪をのり

くわしや

太田と智



同 夏晚泛舟海口

火雲赤日影俱收

泛艇海門橫晚流

萬里長風驅暑去

孤峰明月送涼浮

掉歌遙唱青牛渚

漁笛忽驚白鷺洲

人世聲譽何足慕

一身已任一輕舟

井口仲虎

入るそわゆる

光のあけき

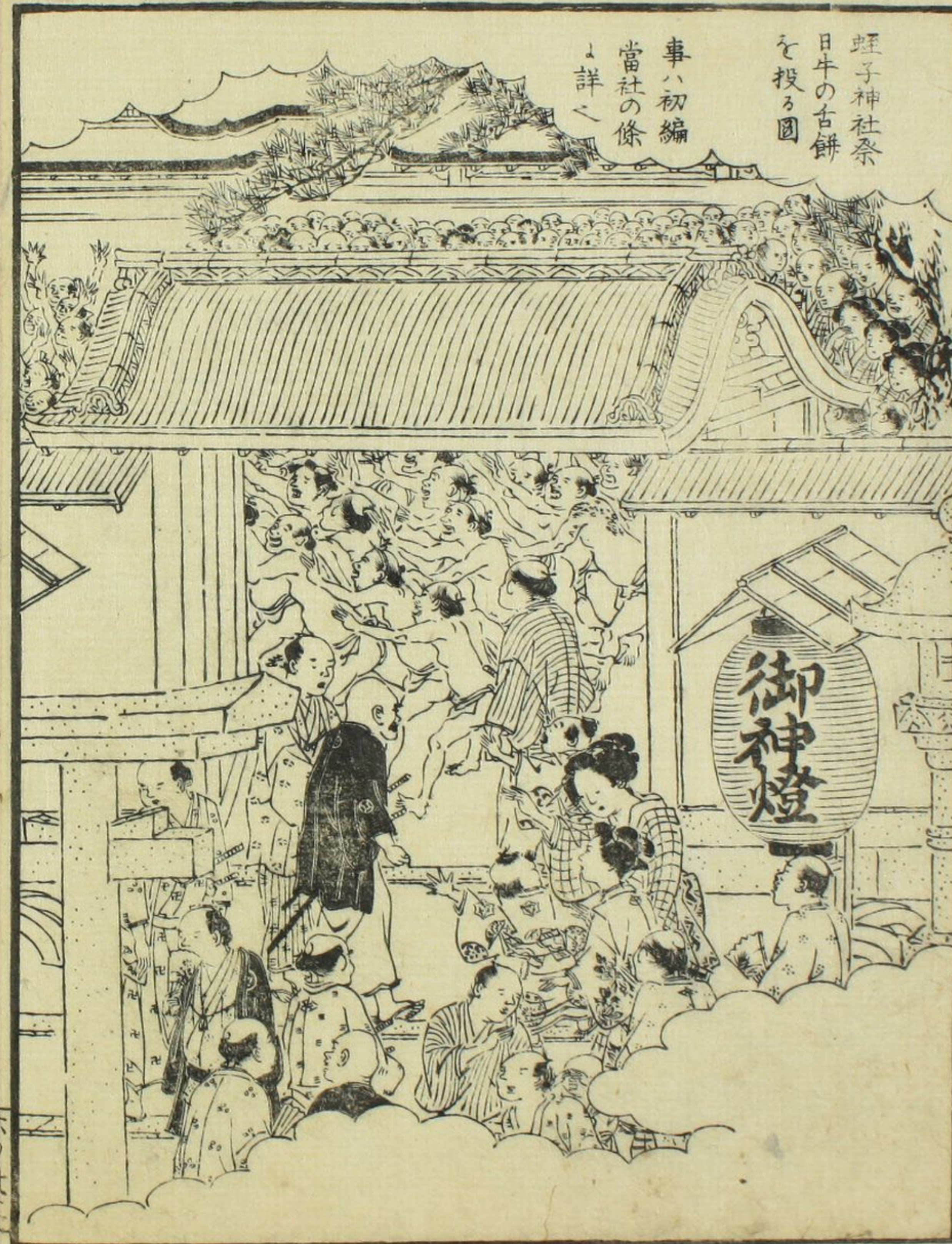
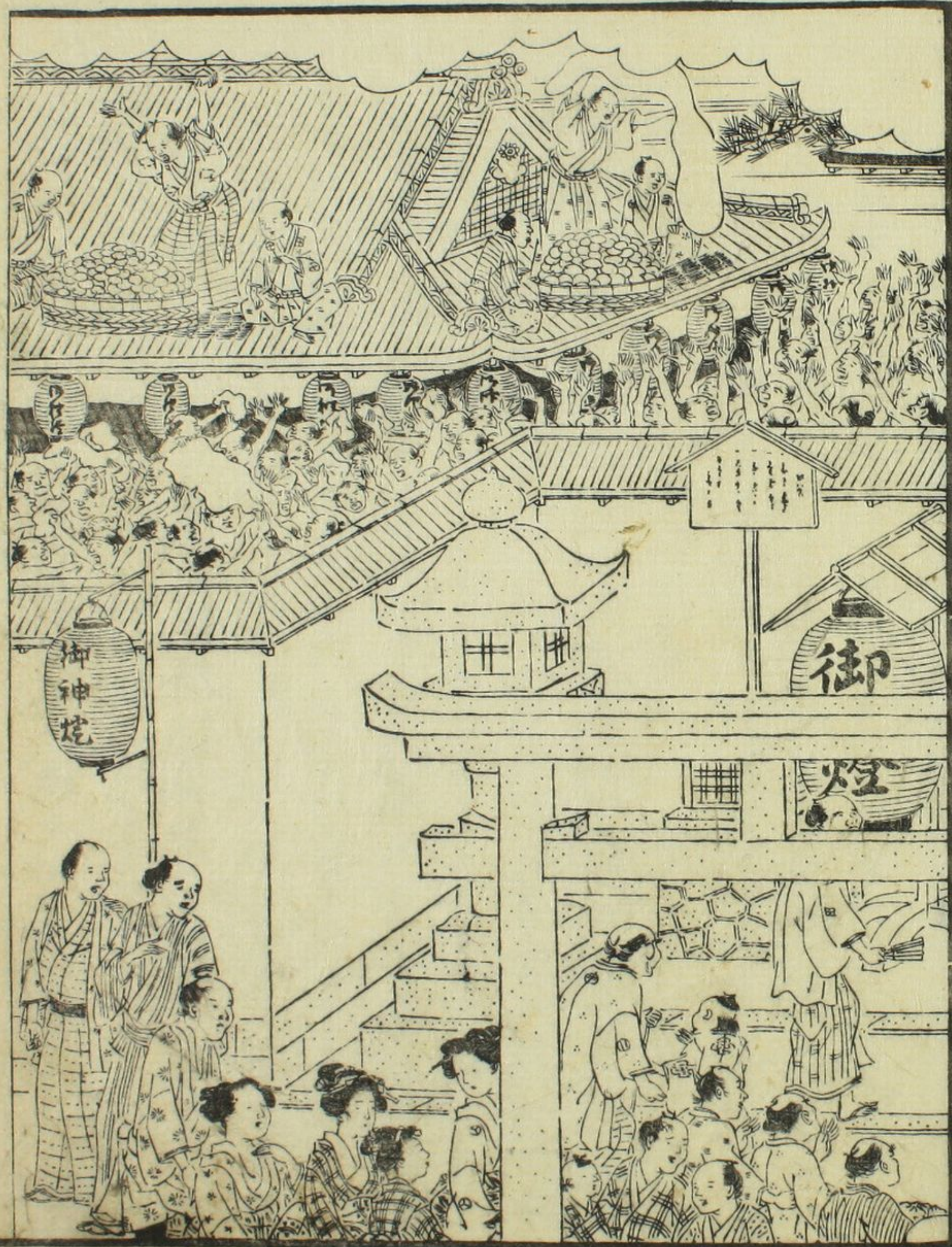
けい

ゆつやみの

るる

本居大平





殆ふ諸國海濱郡郷の名は海部と称する者皆其部之本國
も亦郡名を存すゆゆ其部多うゆゆ六や志るゆゆ
欽明天皇七年の紀は紀伊國漁者贄を負ふ州馬の子に
良駒ありしを大和國人川原民直買取し事を載せ同帝
十七年比紀は紀伊國置海部屯倉など入るる本國海人
の古書に見る始之故小延喜内膳式御贄調進の條旬
料紀伊國雜魚上中下ノ旬各三擔半と見え其他本國比
貢調の中は塩一丁三斗鮓一丁八斗鮫一斗六
堅魚九斤久惠腊一丁三十兩滑海
藻一丁八十斤十兩 龜甲十七枚一人 押羊魚一人中男一人 煮塩ノ羊魚一人 鯛楚
割三人 大鯛一人十斤 海藻一人 滑海藻一人 青苔五十斤 海藻根十斤鳥坂
苔五斤 那乃利曾五十斤 大疑菜一百斤 於胡菜三十斤 等を載抄踐祚
大嘗祭の條より本國より獻る雜贄薄鮫四連生鮫生螺各
六籠都志毛古毛各六籠螺貝ノ燒塩十顆ハ并賀多潛女

十人程を量りて採備(一)と見えたり然る小中世浦くも
権門勢家此漁釣と称し莊民寄人と號しく神祇官の
龜甲齋院襍乃堅魚大膳修理木工諸司の海藻雜魚小
をも進濟せりなりぬるより類聚符宣抄見え也

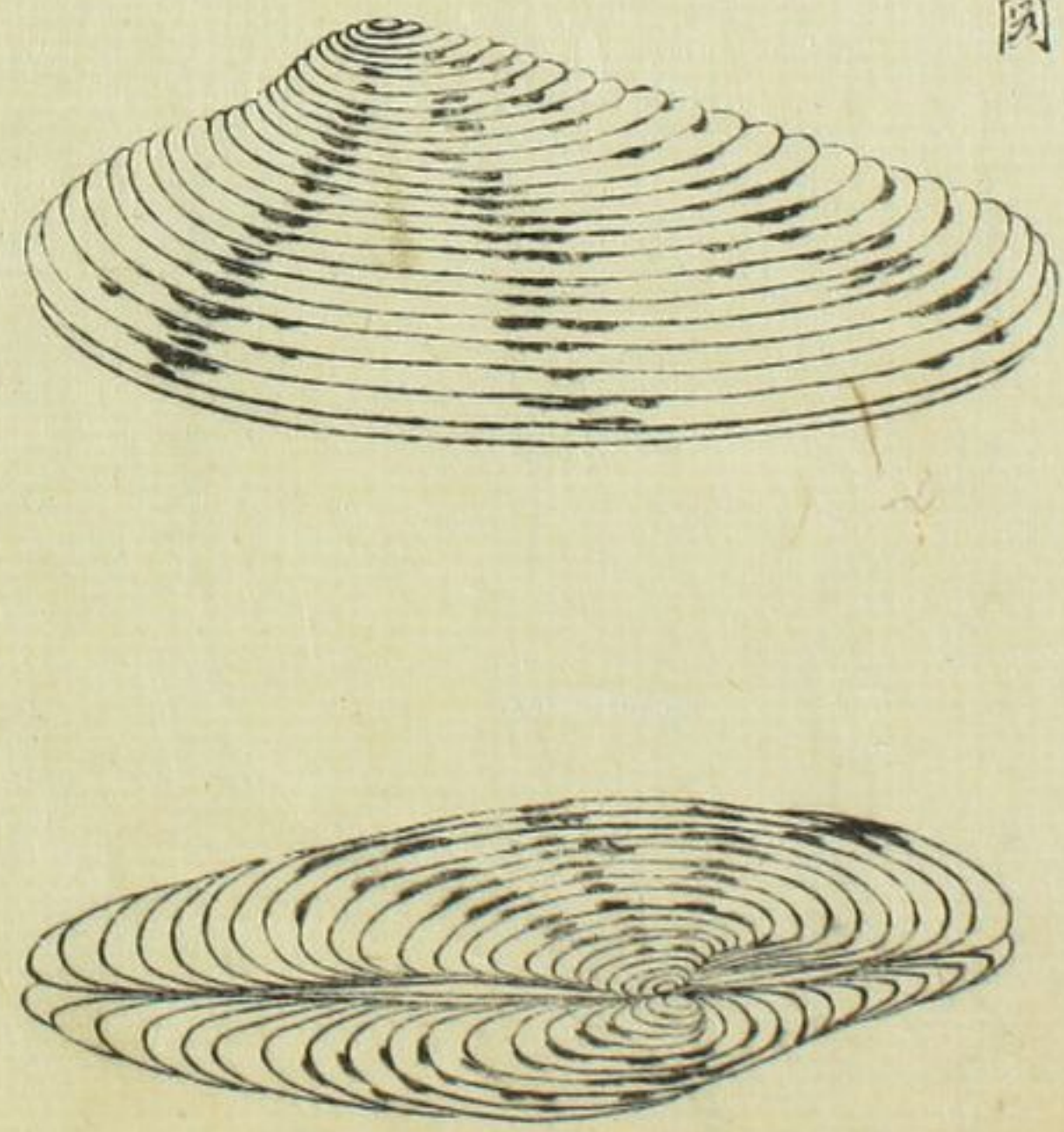
産物 鰯 湊川を上品と
日本靈異記云
若川とれり次く

吉野山有一山寺名号海部峯也帝姬阿倍天皇御世
有一大僧住彼山寺精懃修道疲身弱力不得起居念
欲食魚語弟子曰言我欲啖魚汝求養我弟子受師語
至於紀伊國海邊買鰯八隻納小櫃而歸上

初秋四日紀川浮舟遊漁即賦一絶 藤朝臣俊純
輕舟短棹紀川濱綠水銀沙杳莫垠炎暑未收秋未見
西風網裏紫金鱗

産物 簾具 乃一 種也 今府下比西荒濱より産す吹上の旧地なり

形を以て名とす品類多し直に簾と称する者此一名つらぬといふ
 形筋蛤々似て肌淡褐色斑文光澤あり横に溝隴相並ぶ雌雄あり
 雄は厚く長し雌は壳長く色淡黄して理文細く文点彩色も濃なり
 其大なるを香合とて翫ふ又姫簾々あり一名ヒメと云ふ形芦々
 いふもの似て肌灰白色して褐斑あり又阿波簾々あり形姫簾貝に似て
 肌淡褐色して深褐の斑文光澤あり又伊豫簾々あり形簾々に似て
 肌滑して淡褐或ハ灰白或ハ深褐斑ありて細の如し又一簾々あり
 一名姫あざりといふ形伊豫簾に似て壳薄く
 肌淡黄色簾のこととき横文理あり其一二を因



吹上御別墅の舊跡

出口の西にあり今はらん屋鋪といふ元祿の比にや
 森十兵衛といふ人の記あり古のさま想像すべし

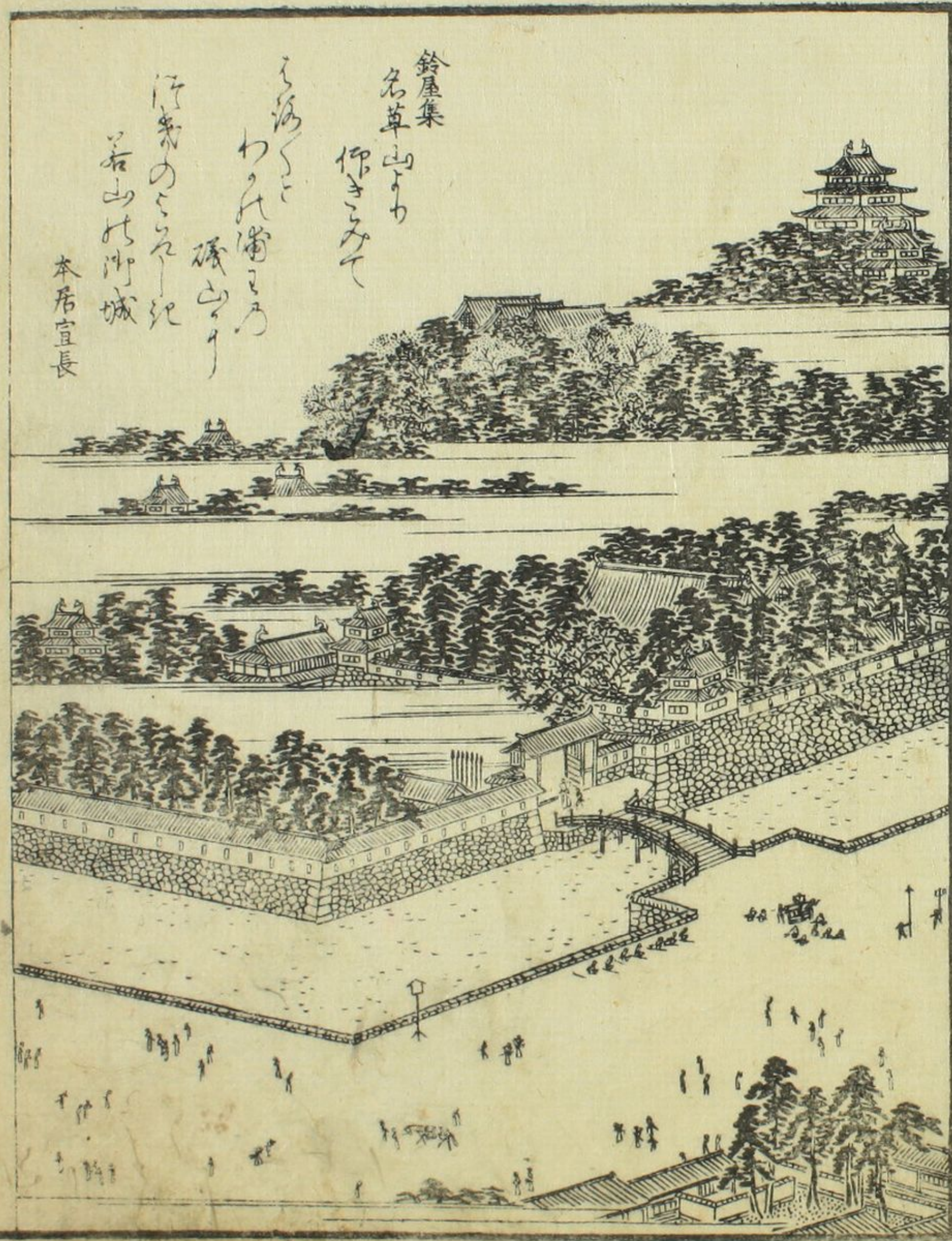
吹上御別墅の記

凡海山れとくれとる色を見ればとてその一りふ
 幸ハ大和もるこ志古今はわりて人の心を性^まを
 養^やの^うを^かを^すす^すなりぬ^きさ^ら此^の上^の濱
 へえより名よおふ所を久を我君ひよりり沖洗
 志久きせ給ふ濱川のほとりよのそみそ松乃林本あ
 立川^たき^よあ^ふら^うら^うら^うわ^れお^まあ^らり
 志つ^しつ^しお^らを^給い^おは^やを^わら^うら^うら^うの^おお^のお^の
 爰^あに^に渡^をを^給つ^て道^道一^おく^く一^一府^府城^城を^とか
 る^事も^つつに^数町^町お^まき^は軒^軒端^端も^いと^近を^れと^人の
 け^来る^道の^ひよ^あら^ぬと^常に^いつ^と物^静や^る西^南に
 う^らら^わわ^わ田^田能^能悪^悪く^浪り^てゆ^らる^淡路^路鳥^鳥の^ゆら^ら
 と^らら^ら阿^阿波^波考^考ふ^とき^くも^近く^もさ^あく^も見^所多^多
 且又此の國のうらに名ある所数多傳ふ中より和歌志補

雑賀の崎形又此浦わくの濱をとやうく此の岸
みきよつきさるれハ朝ふ夕の海士れ小舟の漕ぐるもほと
あくあつこのある聲和布新境やくおろのいとふこんは
もつれくをねとをねとあぬと詠きされ浪をいつとかく
立アとき一われと橋もあつじつ浦風の涼しさを
とこれ小舟の浅芽生のうら枯よとわすの虫のねをあひ
きとたうととをふ千鳥は聲小假寝の差をさよりかと
とていれけくともくもあつはり集め與あふ中よ四代
時うら月の朧るんころ珠うとくれをるんをれれ路志
遠山うらけふと出るよりさわうられく浪のわけて千里
の浪もくやれとらうともえといれをうきを詠め
又して曉らうく成ると月あうかといれとん島山も只此
目の前よなれとさうも聞えし位のえれ唇もむとくにらん

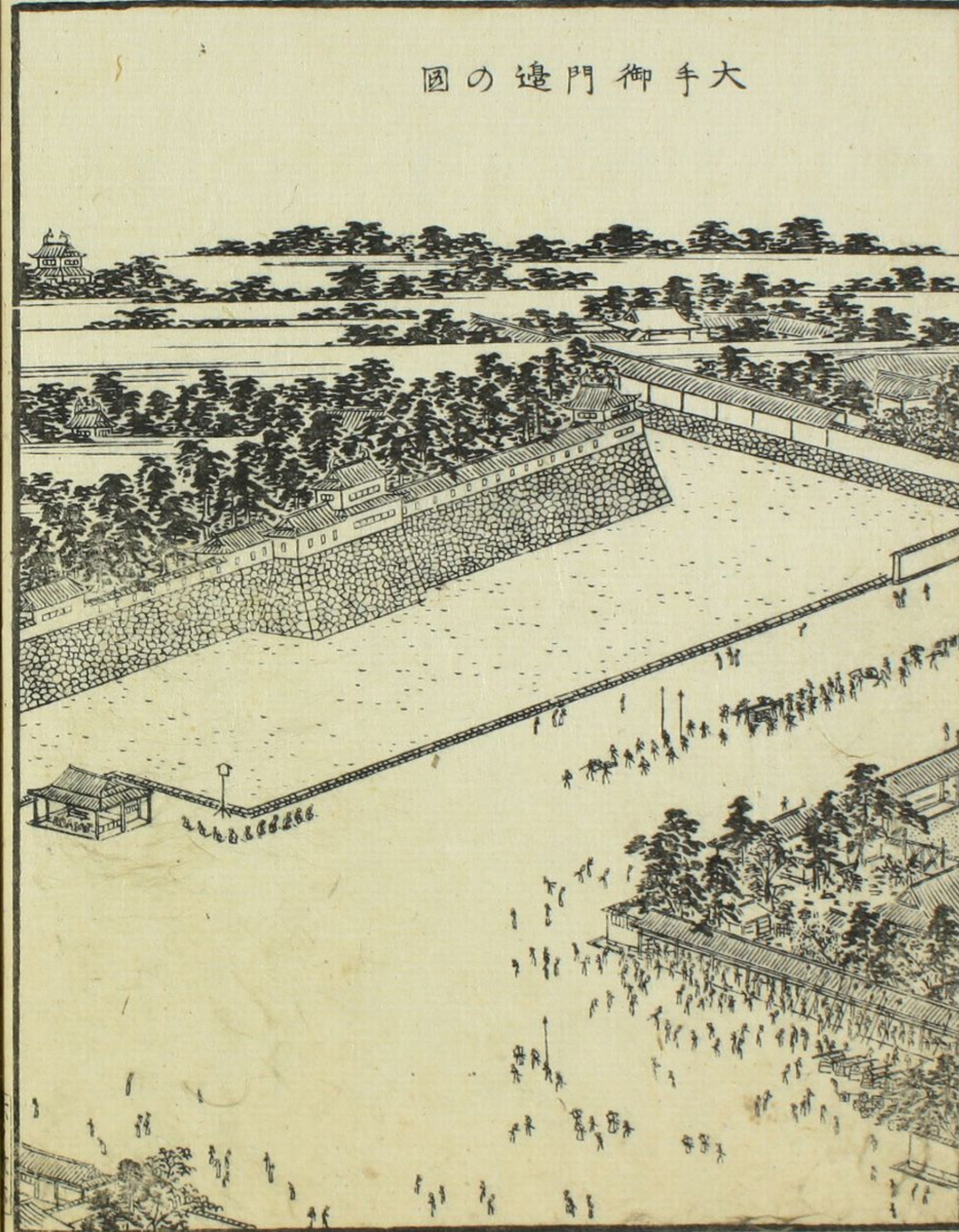
ちううー法師とやもよんるんやうかうんとようー
實よはる事とれとおほゆれいほろも喜れ海へを尺一
人も尺さといはいけいよれ演世うらう一年の春うとよ
柳あつちた近くもつうよはるふの古歌ふと誦ぐるが
あるに作事きさふてことわらうらにおほえねとこのれ書
吉の濱をおほいこあるとや尺さといといとねとほら
うらねるを我極るあれとつみゆと一門魚くや
うはるよんれんあつ演世の明上は浪は澄ふ月くをさ
ねとをよといよ明上の濱ひきく久き思らち世をつくめで
うかなあぬとをれと母さのと書はあ人もうるさなれ
とらうあつるといひを方人よあ

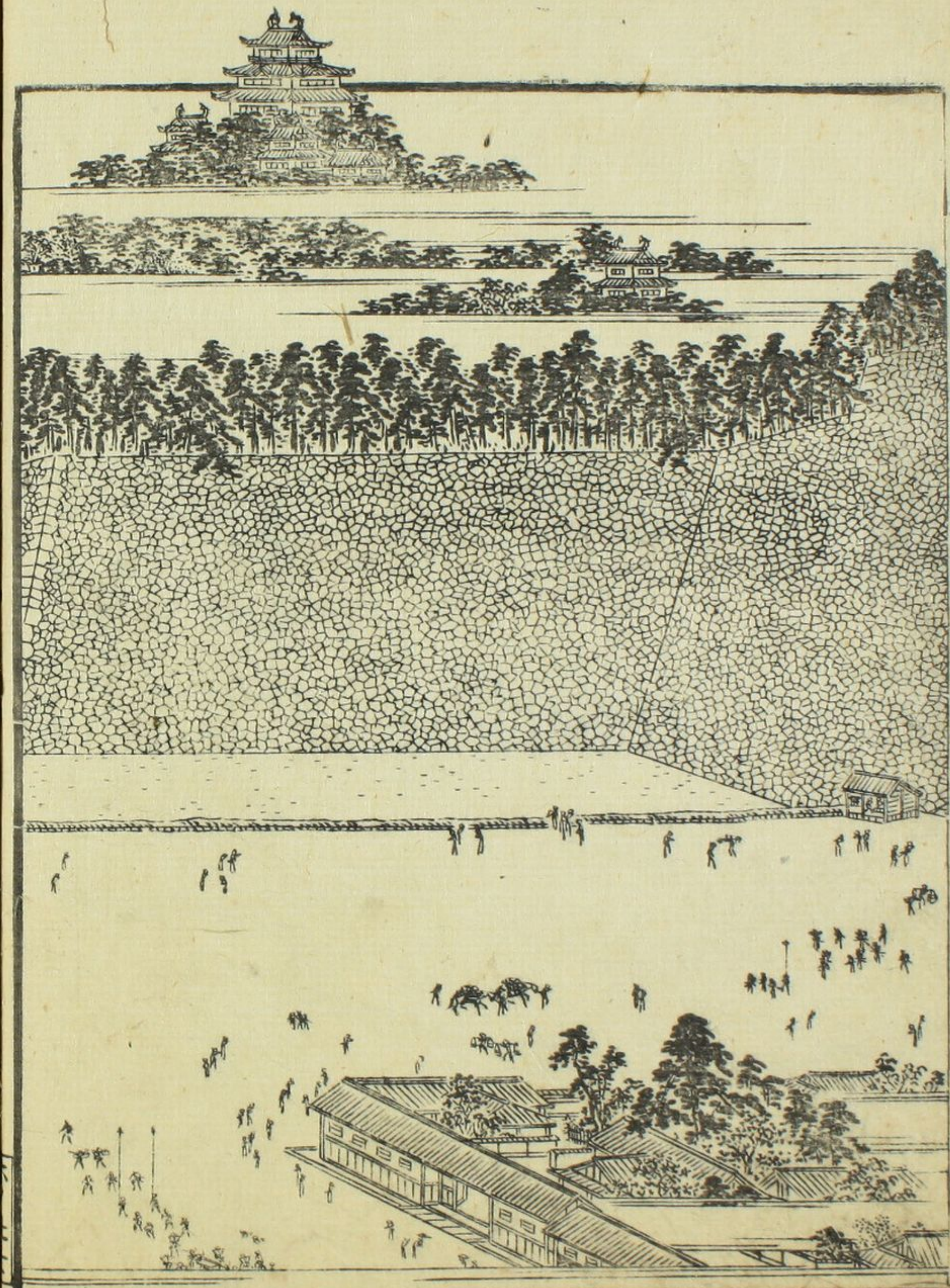
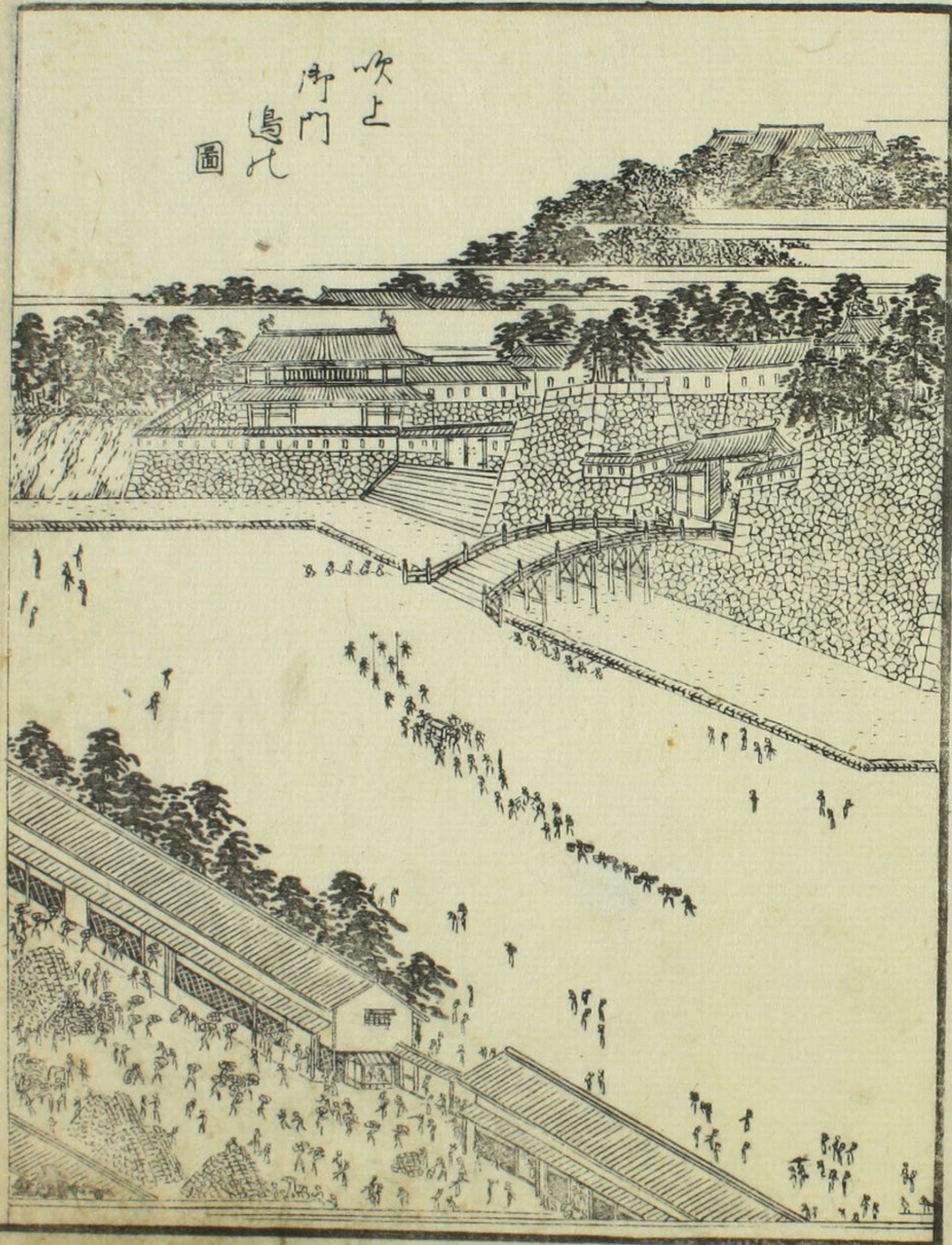
櫻樹 吹上の海濱一吉野掃をうと一幸祇南海自筆の
奇よ又西南海のうらめはら一なれはちあみり載す
きつとにうら燈は橋喜風よ名をよれ演よんるの源瑜

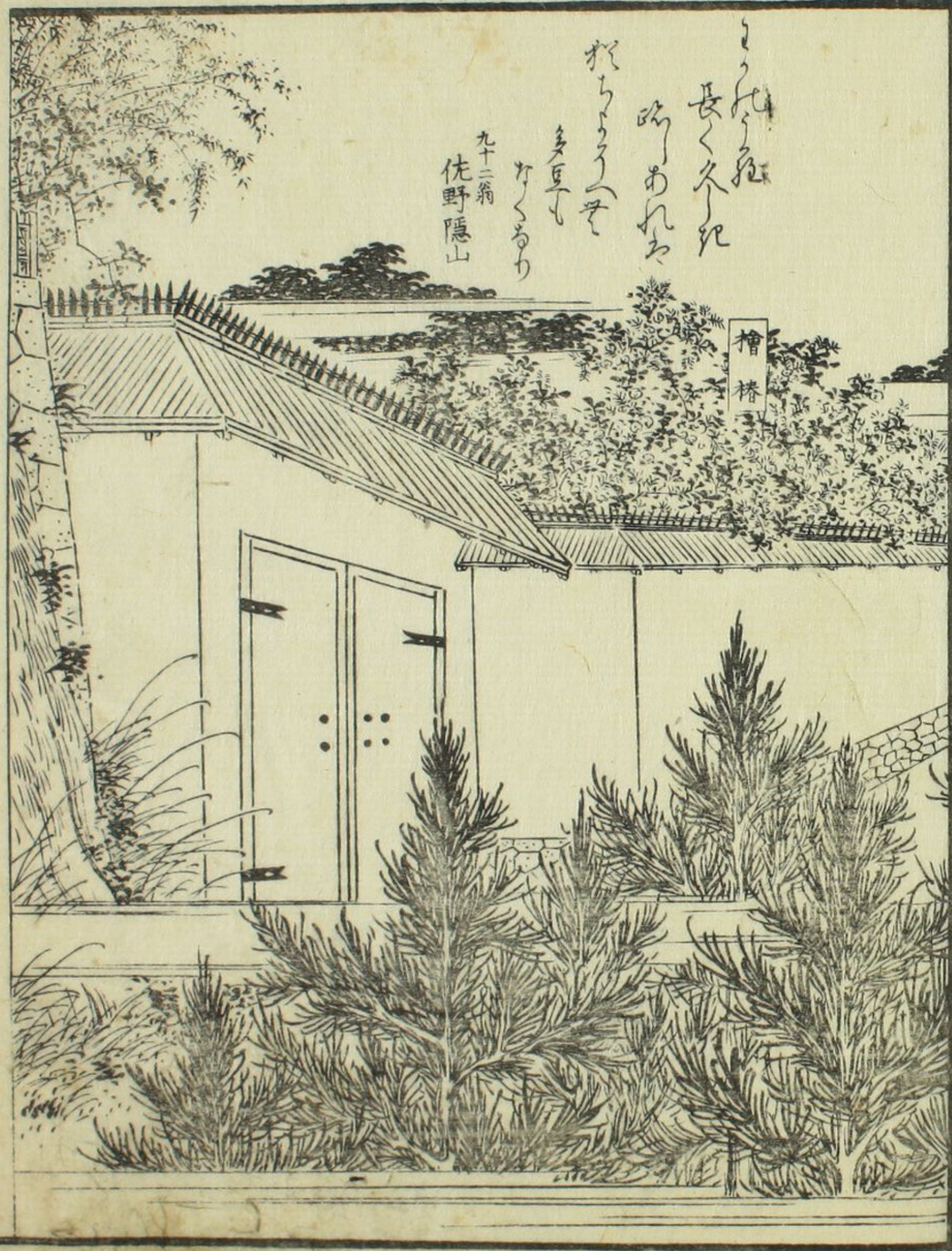


鈴屋集
 名草山より
 仰きこみて
 海く
 われ浦より
 磯より
 行きのとらへ紀
 若山此洲城
 本居宣長

大手御門の園

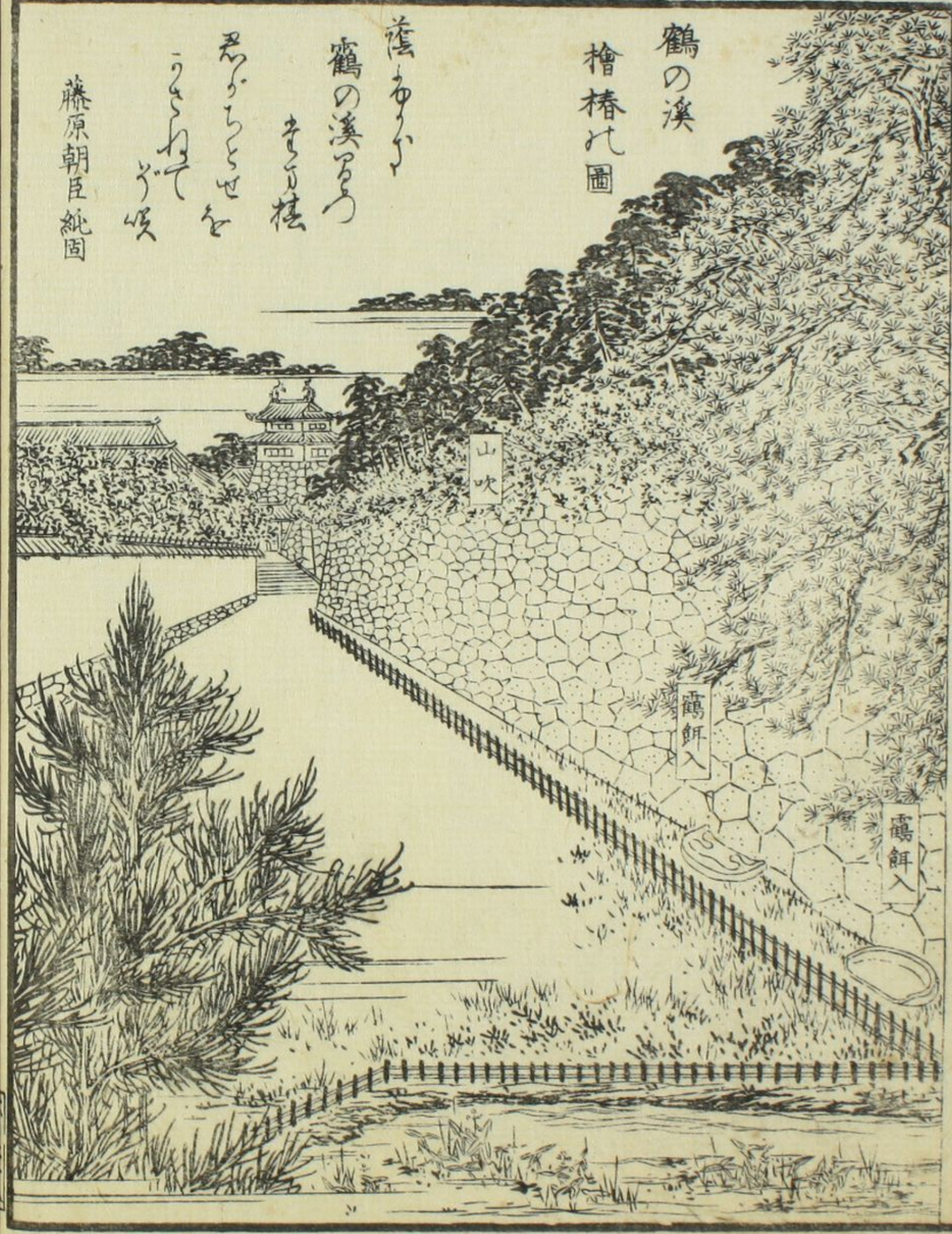






長く久し
 於らうそ
 多豆も
 九十二翁
 佐野隠山

檜橋



鶴の溪
 檜橋此圖
 藤原朝臣純固

鶴餅

鶴餅

鶴溪 内部の
中より

浅野氏の頃鶴を飼養し所を鶴の溪といはる
りし今も鶴の餌入といはれ傳ふる器二ツありて名
のまを冠す千歳とて流るる改をとりしは珍し溪の中
ハ苔深き巖の常々滴り汀の亀美代の敷を履重りて遊
び仙人の洞を入るるちひされ八千代乃玉椿も亦えは
ま生繁りて幹は枝葉も核系も似るるを此數多やとて
瑞々しく生えしをこれハ檜榎と名けしを此溪に名する一
種とされ巨勢山形別々楮紙屋川迄の落榎代萩といふ一
花を紅白段などハ更にもいふ八重も亦もしくありて咲
列りて種々の名をあれと核系乃やとては亦別々又玉
川の柵などて垣あり咲ける山は千本八千本をいひ
ては心風を散りあ露もなつて



八重檜榎の圖



一重繪替の図

大手御門 京橋口よむくろり城隍
御舞臺 西の丸
西の丸
御舞臺
西の丸

観玉集

御位もてせぬるのうらみは猿樂優りて八十殿人の餐賜れり事ありは
正月十餘三日の月夜さえりるに雲儼と溶けて朧も木立も白妙なる
ねもあそび手感ると舞おしる面白くそといふ中々藤原千廣
萬世はけぬのおとにさうりて雪もうてねの松よりらるる
ふー

藤原朝臣純固

吹上御門 大手御門の西よあり鷹の羽のうら
遠の紋あり浅野氏領主の比れ余波那也

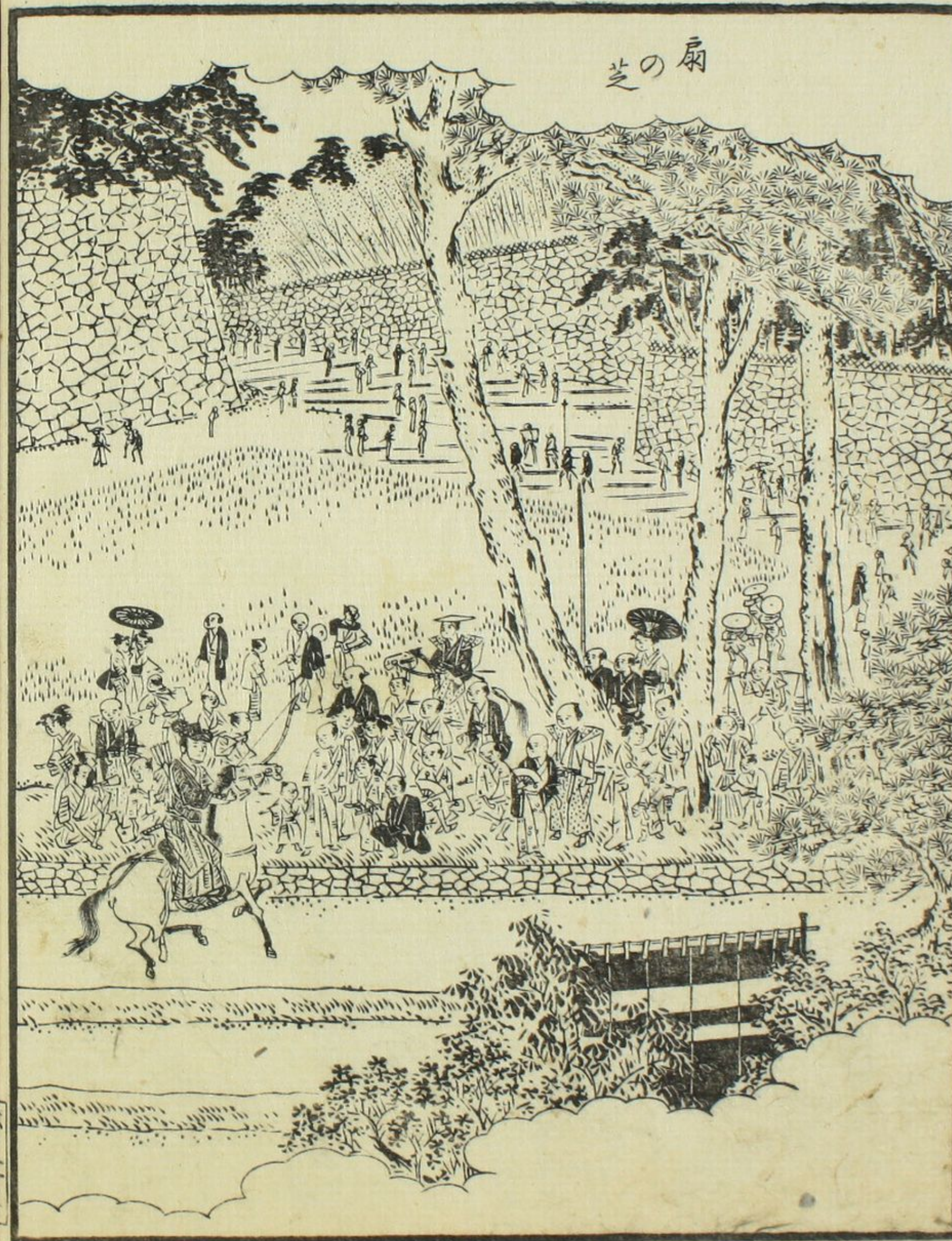
浅紀州 太守庭前芍薬

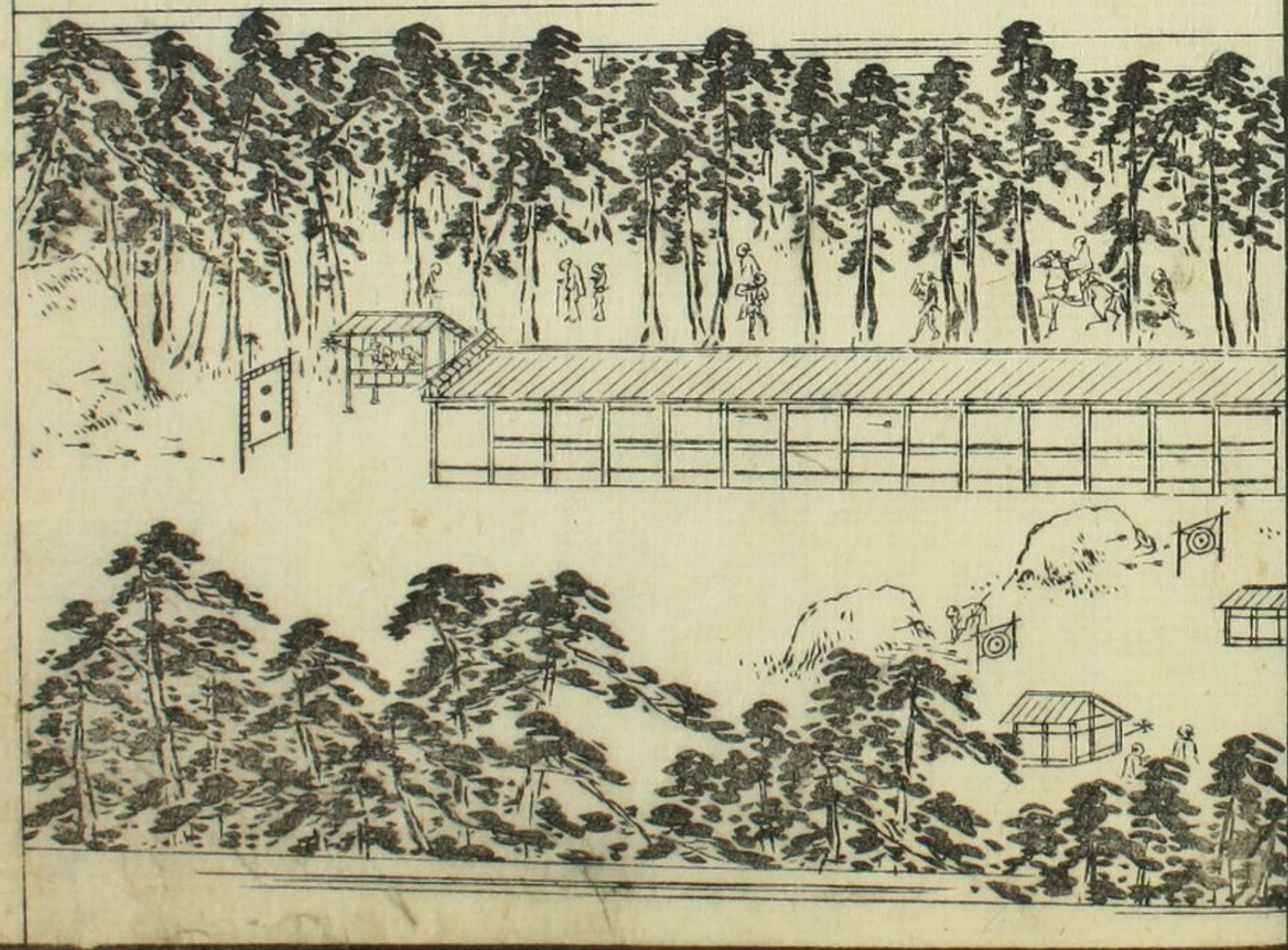
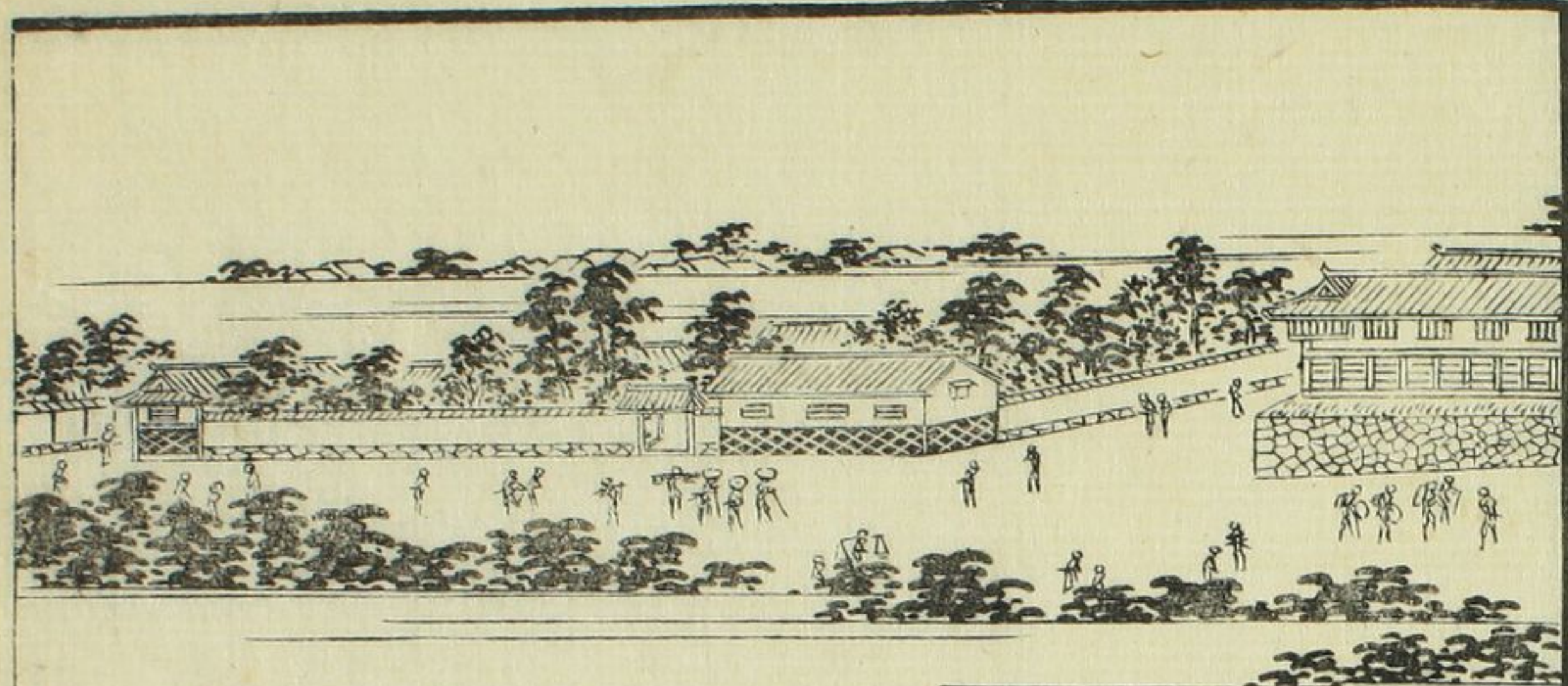
満庭芍薬絶比倫 白く紅く 錯雜新七頼 國家賢寄
相除斯花外更何人

吹上冠木御門 吹上御門
の東よあり

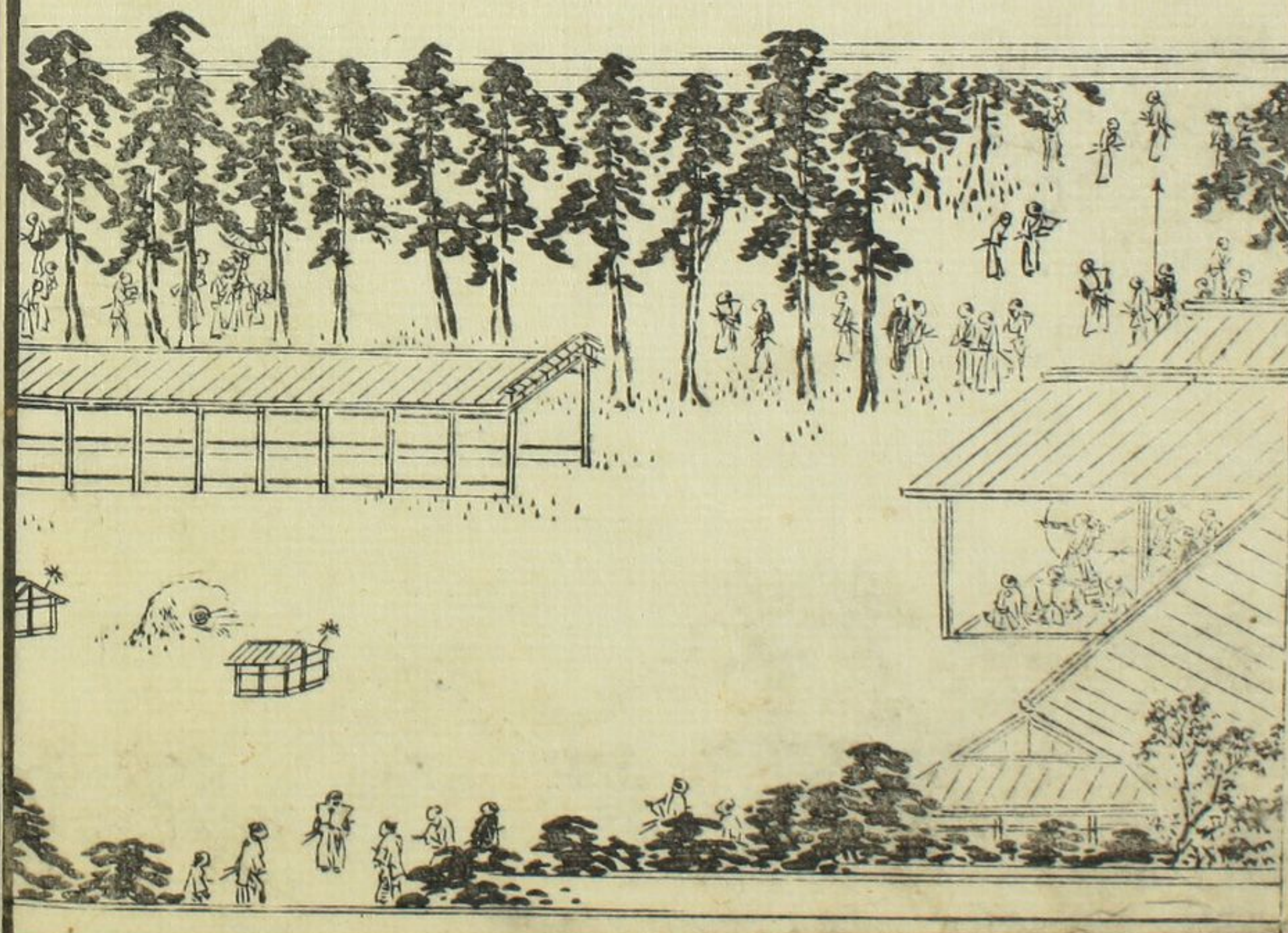
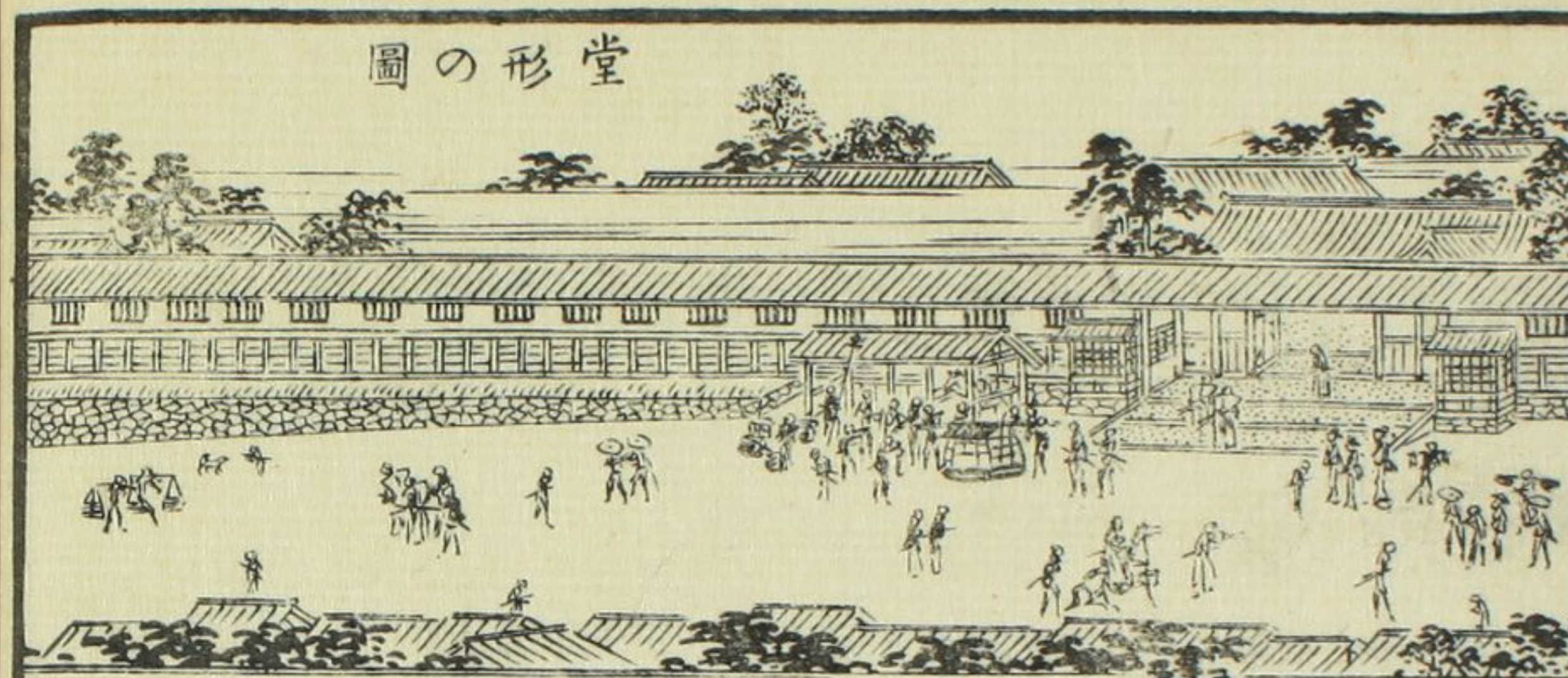
追廻 | 口邊往來の圖







堂形の圖



紀藩書感

頼 裏

藩府形便接鎮臺吾公昔日剪蒿萊山分幾甸逶迤

遠海擁西南溝洫開平蔡功勳憑胤武殫殷戈戟馘

廉來移封二百星霜變誰識孤臣頭數回紀与大坂
曆齒吾藝

舊封元和之役歸順戰于樞井獲大坂
將塙丹輪等故頭聯云胤武用韓碑字

追廻御門府城の西あり傍小馬場
ありて馬を馳らしと名とす

扇の芝追廻一口の南あり
此追廻名松原といふ

芝生の形北より東南へ廣くして扇を開ききんやうなれ

流るるく扇の芝と呼ぶをこの山城北宇治よりありといふ

名もろ通一とも是をさる思ひしき路はありてあせ整る要

の松さへ極終るる松の木本より道二筋より分れ廣瀬吹上

と往通ふ人常は流るる以上の道は門原の真砂流らるに

廣瀬のさる竹の林の蔭暗し芝生を春去雨の降るるに

とや能きまきしてゆかぬ地を張きあを念ひあ

つくんとく遅くと和暖ゆる日る近きありの寺部とも振く

とふくつ考ふの菓子氏食等をとり出く遊遊のよむれ

をねし日の傾くをもし知ふ傍那る馬場をねし

系平蹄蹴は蹴はけふ塵煙日く霞とるけき霧とる立

のなれしわきて騎射の日を射る人の装束とわくなれん人

遠近より羣来て土手は雙松隙るぬるま立るあわてお

のがく心を馳せぬ

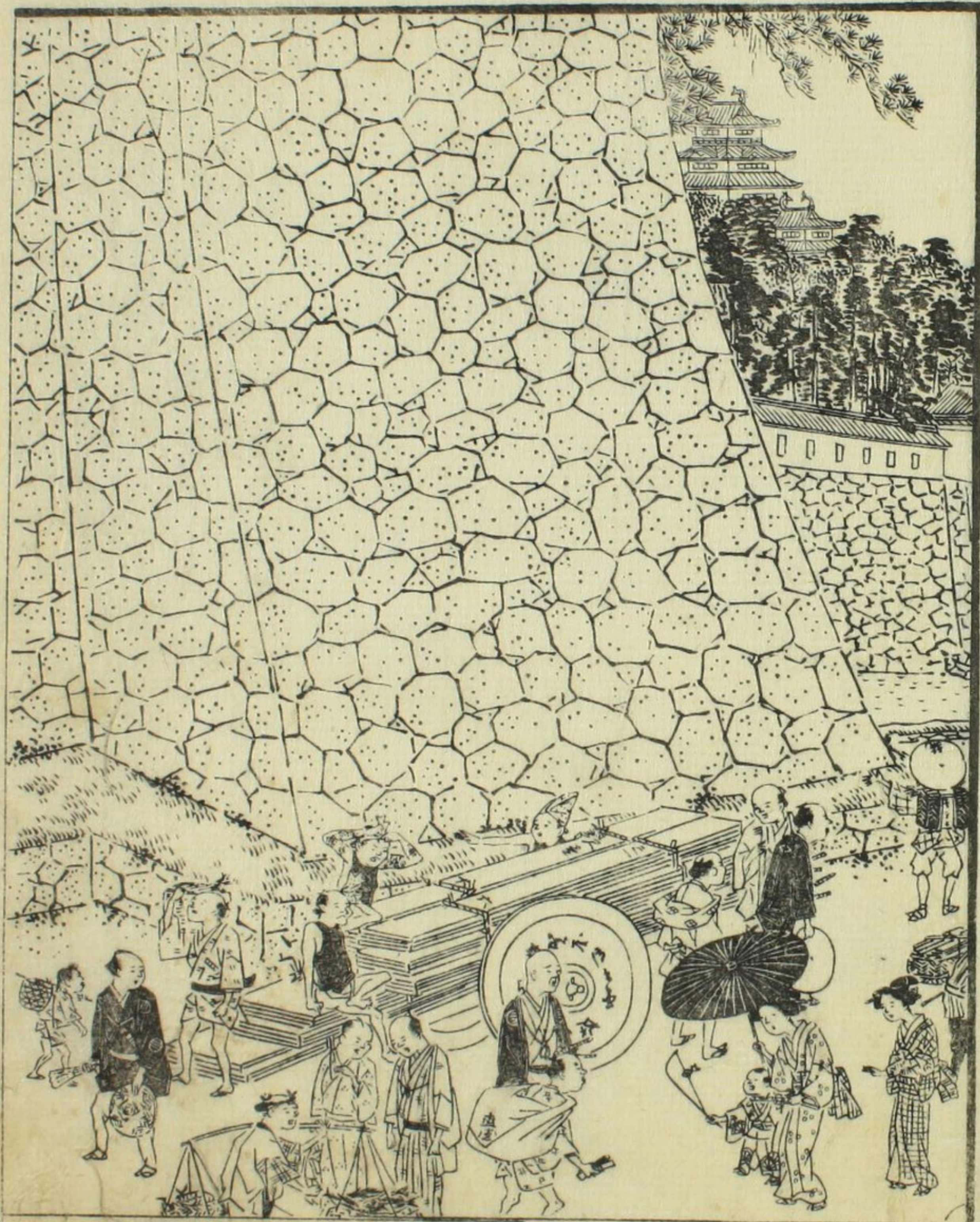
因よいつ古の制諸國に軍團を建て各其地名を以て某の

團といひて卷首に裁する天平北解文に軍團の精天平元

年定精壹佰玖拾壹斛とる即本國に團あり國の

兵士弓馬に便なるを騎兵の隊とる余ハ歩兵の隊とる然ふ

に其制後世廢きて本國に團と稱し地今知やうそ按る



高石垣の畧圖

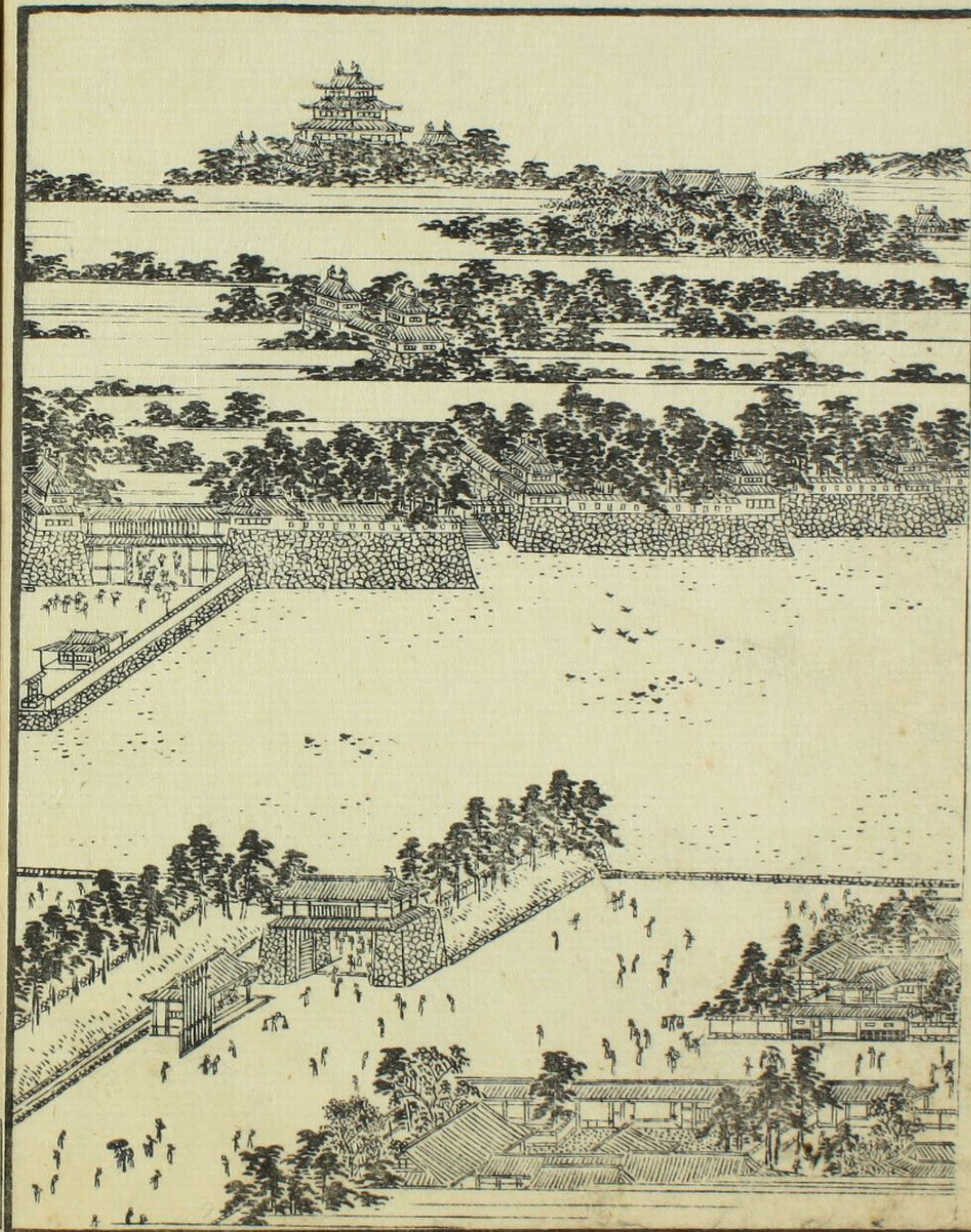
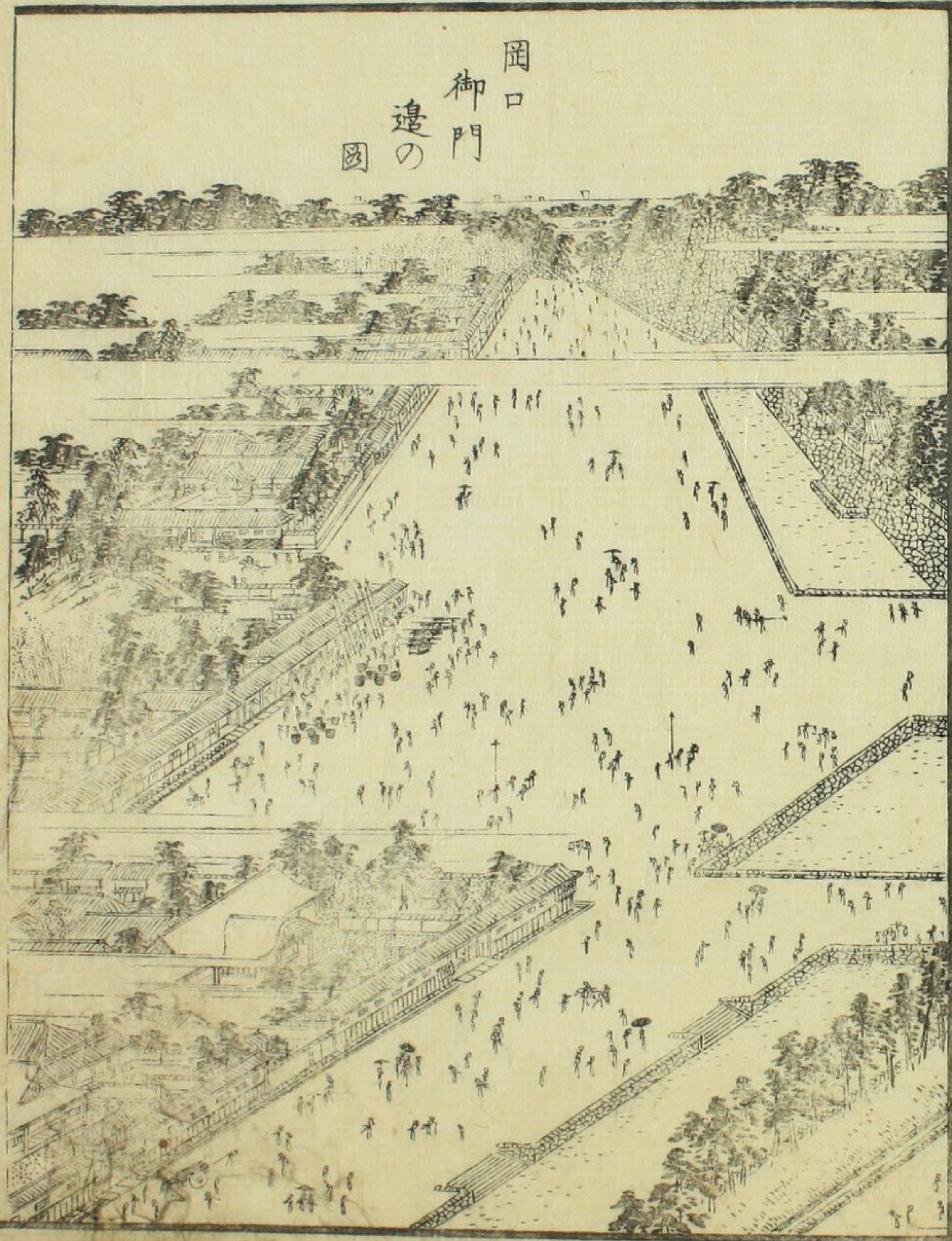
此の石垣は
伊都郡竜門山
の石垣なり

突兀閼闔氣勢雄
鑿開越了五丁功
風清壇埒朝調馬
草綠平岡日試弓
儀仗暗未松色際
城樓影動水光中
巖障偏訝非人力
祖業真忠名不空

無名氏

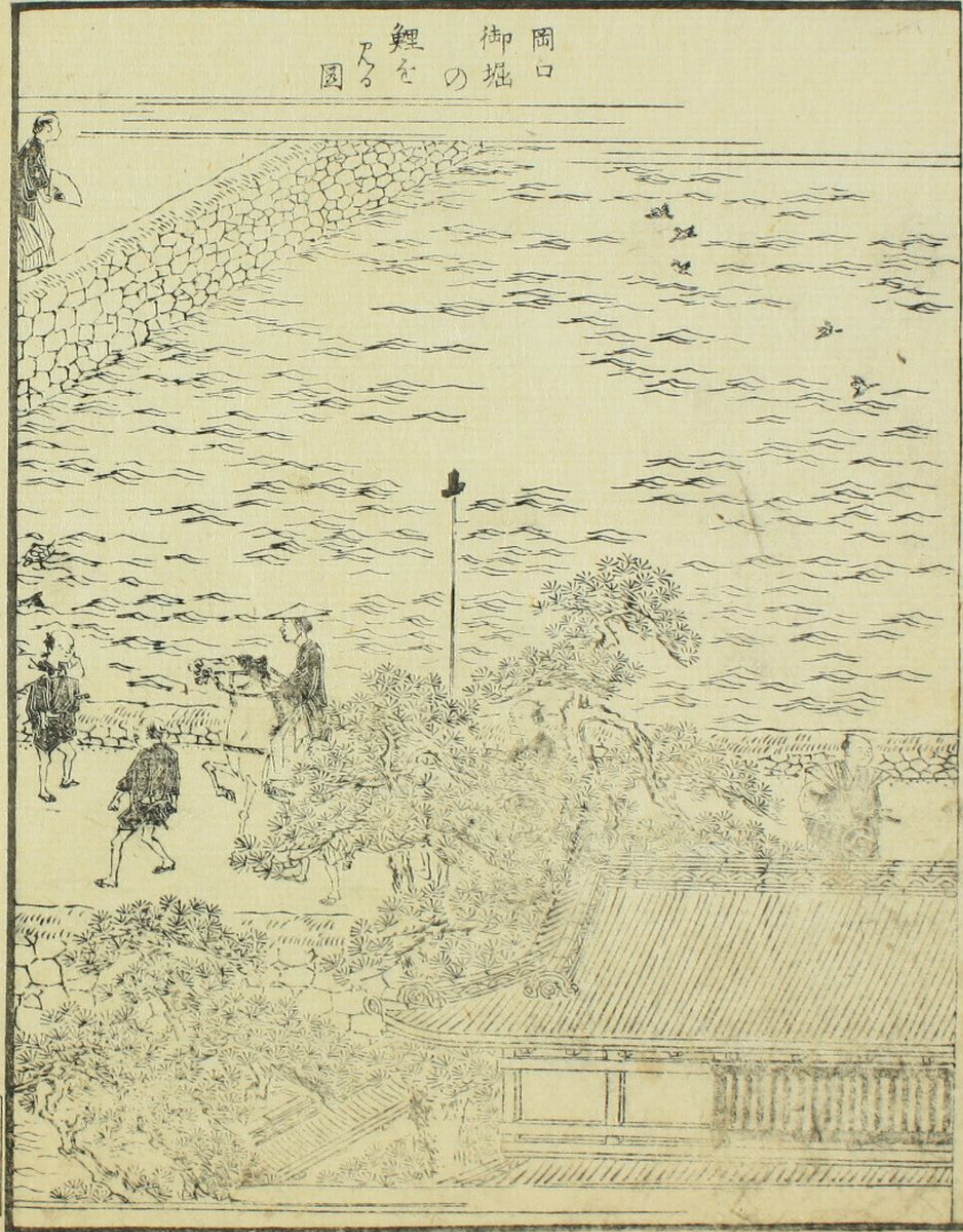


岡口
御門
邊の
圖





岡口御堀の鯉を
見る園



は那賀郡荒川郷に隈村あり是古荒川團といひて大伴氏
等ハ兵士武を講じ一所なりし通音を以て隈村と改
めしむるなり一抑武事ハ天忍日命を以て始と其裔大伴
佐伯の二氏に分る本國上古大伴氏の後名草那賀二郡小
充滿なりハ武事盛なり人々事初るなり其一二をい
く敏達天皇於仰せし宇治大伴連あり神龜元年ハ大
伴標津連子人あり天平神護元年に大伴宿祢人成あり
寶龜年中ハ大伴孔子古其子船主其子益継其子貞
宗等あり皆古書にハハ又靈異記ハ沙弥信行を俗姓大
伴連といひ續紀ハ大伴部押人の先祖を本國の人とあり
其他仁壽四年の田券ハ伴宿祢元弘年中の文書ハ和
佐又次郎大伴實村小倉孫十郎大伴兼綱等見えたり
按るハ源平盛衰記ハ粉川寺ハ開基孔子古を誤りて

大伴小手といひ小手ハ挾手彦の事をいひて挾手彦ハ
孔子古ハ祖先なりより誤れるハ或ハ佐手磨の誤り佐手磨ハ
袖中抄ハ遣唐使大伴宿祢佐手磨記といふを引て天平
勝寶二年紀伊國ハ歸著とといハ是も亦本國の人あり
ハ又雄畧ハ河世新羅征伐小大伴談連及紀齒前未
目連力戦をハ事談載ハ齒前連ハ今名草郡岡崎郷の
人なりハこれハ談連も本國より出ル人なりハ古本姓氏
録ハ大伴大田宿祢ハ天押日命十一世孫談連之後也とあり
て大田の名和名鈔名草郡の郷名なりハこれハ本國の地名
より起るハ氏なりハハ受ゆハハハ後世其裔種より別れ
居所の名を以て苗字とて本姓を忘る或ハ家系を失ハ或ハ
漫ハ他姓を犯シて遂ハ其祖先を知る者も多かり

高石垣

内郭の西ハ築々石垣高さ數十丈故ハ
高石垣の名あり石垣の上古松繁茂とあり

固口御門 内郭東の入口なり
城池鯉

大城を遠きる水玉松の緑を深き長久澄と汀を
石ハ鮮滑して紋ある小く浪いと静き當初往来の人と鯉
浮るを見て餌を與へし漸く巽の一隅小寄来る鯉年々
と救そのぬれハ何のはより炙餅或る焦る麦などを
ぐ若其傍よりなる店を構りり行客志く爰に休
ひて炙餅をえて水より投ま二三尺も餘れる鯉も
かく群来て我劣りと喰喝の或ハ潑刺も争ふを
戯とと丹生川に釜を沈めて此の池の故事
松のぬれ 冷齋夜話小東坡詩我識南屏金鯉魚西湖
南屏山興教寺池有鯉十餘尾金色道人齋
餘争倚檻投餅餌為
戯と尺く争ふも何事

和歌道 湊の東

南北と海と府下より和歌浦に至る本道なれば名と此邊惣名
を吹上と云是より新堀を経て高松に至る此道ハ元和以後用
れ所と列松道を挟むる直道なり古道ハ是より西にて地勢
大に變せり永兼三年関白頼通公高野参詣の歸路和歌浦遊
覽記古道のほを初るこれ因てに載す 前編引る庵主記公任卿
家集の文かと併考す
永兼三年記
十八日癸未月天晴卯刻供御膳所々饗饌了令立
御宿給之間召國司定家 此人傳不詳名草郡藥勝寺
下せる治曆の官符小據に
任ト同五年任を解し賜御馬一匹 毛 方棹華船迄于木
御川尻令下給 川上より船より今ハ幡堤
の邊より上陸せり成す 是行路之便為
御覽吹上濱和歌浦也已刺之終者御湊口 此湊口ハ大
抵今の宇治より湊
のほをよみかたり 御馬并人々馬共遲將未間光景欲
碩極興難抑仍先召國司陪從近邊所在之馬各宛
騎用先御覽吹上濱朱紫比袖尊卑争行于時蒼海

渺邈暗砂崔嵬如登山似向葱嶺湊より今福村を過き西濱村関戸
村の^{こゝ}を通過せ給ふ^る如^ん此邊ハ一面の砂濱^てきハ山の如く卑きハ谷の如く^{あり}故如登山^{天山}似向葱嶺^{といへ}夫より
高松の^わ頃之^の經雜賀松原公任卿集^るあり令向
和詞浦給翠松傾盖白浪洗蹄是和哥浦^{に至}て海辺の界^{あり}松原を歴て淡辺
飽地勢^殊感土宜之稟天然猶指點吹上之濱和歌
浦雖山邊之說柿本之詞合此地亦難矣加之按轡
扣鞍爭拾色々貝之輩已不別老若各任志之及乘
興之餘殆忘日暮夫より濱邊^{まで}貝^{あり}拾ひ玉津島^の邊^へ行て夫より濱邊^の事^ハ畧^せて
未剋還御御舩贄殿供御湯漬國司獻檜破子荷御料^{次々}皆以色紙^付標申剋於木濱御馬自笠道山令通給船^ハ紀川^を渡^り給^ふる^事木濱^ハ今^の栗谷^のあり^をつ^かふ^事を^一笠道山^{より}令^返給^ふる^事貴志栗谷^ハ若^城山の麓^{より}海^に

らぢれハ是より梅原より^{三笠谷}より
和泉国孝子^{こゝ}えられ^て是古の本道^{あり}山中兼燭海濱伴月
亥剋之終着御日根御宿國司御儲如例

里宮山無量光寺大恩寺の東あり

文政十二年徳本行者の徒弟官許を得て造立も行者を
推して當寺の開基と末寺五箇寺を附も堂宇尤壯麗
して參詣多一日々專念比念佛懈な

車坂稻荷社大智寺境内山上あり

鎮坐の時歴詳なら^ば近世奇瑞新^して祈願の者多^し其
願成就も^も及て必朱鳥居を建^つて故^に社頭^{まで}一
二丁の間幾筋も^もれ^ば大小数千基を^もり列^せて松林中
常小紅葉を觀^ること^も

登大智寺山即更
兩餘邱景遠^舎煙境近吹濱物色鮮
幽夢避塵無一事掬出半天月蟬娟
竹村菽渚
山腰潮水帶涼傳東南林嶺當橋見
左右秧田接戸連

淺草文庫印

辨疑書目錄、金澤文庫并足利學校の事を記せる條下、山口本と江戸淺草の別莊、畜をる羣書、押せる印、考、あんど此、本藩の醫板、坂ト齋の祖手鈔、鍼灸聚芳四卷有、那波道圓及陳元寶、跋皆真蹟、卷末有淺草文庫印、記ト齋名如春世為名醫、好畜書、居於淺草寺之北、明曆元年十一月卒、墓在竹門、醫王院、林學士信篤銘とあり、今家藏の書籍、押、を奉、馬、好古の人、示、以、如、春、著、書、の中、家、傳、子、の、鍼、灸、資、生、經、馬、本、道、春、學、士、の、跋、あり、又、關、ヶ、原、日、記、あり、此、書、の、こ、と、既、に、鈴、屋、翁、の、玉、勝、同、く、見、る、り、又、宋、板、の、編、年、五、見、圖、後、圓、觀、院、天、皇、永、和、二、年、に、龍、刻、せ、り、書、偶、遺、る、を、得、て、再、校、せ、り、此、板、今、七、り、卷、末、に、道、慶、真、榮、寺、の、跋、あり、

鍼灸聚芳跋

嘗觀人之生也、以水土之失、宜則疾病、因焉、古之聖人、既、功、速、也、此、鍼、灸、之、書、然、又、以、為、草、木、効、遲、不、若、二、書、流、傳、於、世、久、矣、醫、板、所、錄、作、也、茲、有、鍼、灸、之、要、珍、其、傳、焉、倘、亦、以、久、矣、醫、板、所、錄、作、也、茲、有、鍼、灸、之、要、疲、癢、者、乎、不、佞、偶、以、金、火、衰、披、閱、而、有、不、及、而、起、千、百、世、之、尤、以、旌、吾、翁、力、古、之、功、明、崇、禎、戊、寅、孟、秋、中、浣、十、九、日、虎、林、元、贊、謹、題、

曆代帝王編年五見之圖跋

璞以、下、而、出、劍、自、雷、而、顯、一、物、且、然、况、乎、帝、係、者、乎、編、年、之、成、於、行、齋、犬、人、者、豈、偶、然、哉、此、圖、乃、有、宋、馬、氏、仲、虎、其、編、集、刊、行、於、齋、犬、人、者、豈、偶、然、哉、此、圖、乃、有、宋、馬、氏、仲、亡、其、極、泯、焉、然、而、一、日、幸、存、於、禪、室、其、善、本、參、考、一、於、是、犬、人、即、抽、悠、而、一、篇、幸、存、於、禪、室、其、善、本、參、考、一、於、費、刊、即、抽、悠、而、一、篇、幸、存、於、禪、室、其、善、本、參、考、一、於、之、至、者、也、走、幸、蒙、犬、人、柔、遠、之、仁、寒、暑、而、賜、裘、葛、疾、病、

淺草文庫



李真榮謹書于紀州

日前宮除夜參詣

廣瀬大橋を言ふて
行程九十二丁あり

府下の俗除夜、た癩除、或は祈願あり者、裸體、跣足、腰下に志米繩を結ひ、手、一、刀を携へ、神社に詣り、身を裸、赤、といふ、日前宮に近郷に坐して、尊敬他、異を、言、ひ、詣、り、る、者、夥、し、廣

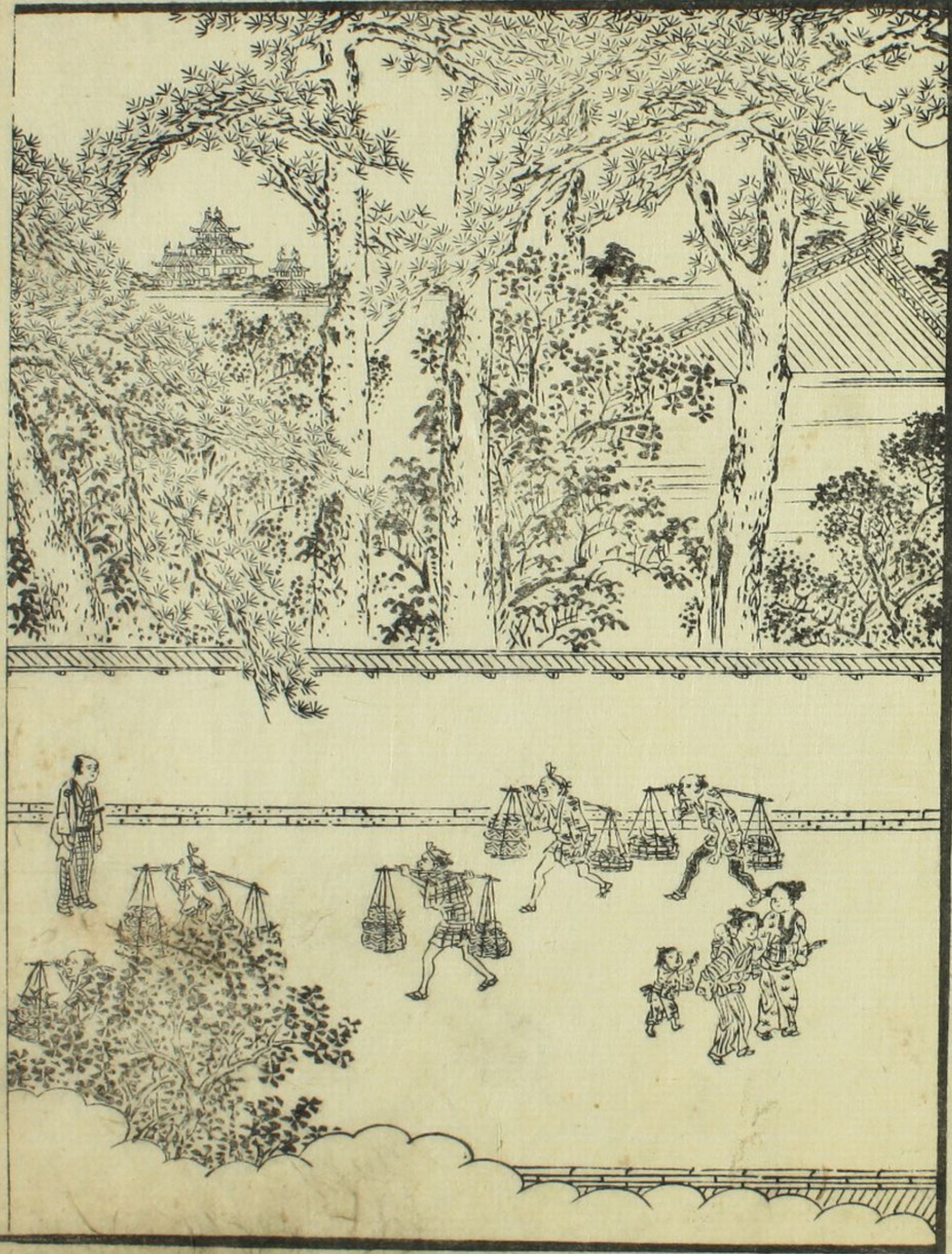
瀬の大橋其次に架れ多を以て町くの者西より南より出あひて
羣聚をなす寒風を凌ぎ競ひ走れは音揚邊に寄り
て雷の轟くこと

泰詣の役志米繩をくきて社頭比枚に掛くことあり
因より日前國懸兩大神宮の御鎮坐等の事前篇誤多く先筆の説も區ぐられと釋日本紀に引る大倭本紀の傳正に聞ゆまに今此りのせく國造家曆應比欵状と合を考へ
その大畧を示し

一書曰天皇之始命天降來之時共副護齋
鏡三面子鈴丁合也

本書註云一鏡者天照大神之御靈名天懸大神也
日前宮御靈是なり一鏡者天照大神之前御靈名國懸大神
國懸宮此御靈實日身是也日身を直し鏡合意とあり内裏賢所に坐すも今鑄造日身此鏡少不御鏡なり故あり事なり今紀伊國名草宮
崇敬解祭大神也今兩宮の地是也一鏡及子鈴者天皇御
食津神朝夕御食夜護日護齋奉大神今卷向穴

師社官所坐解祭大神也寬永雜記よりく國造家齋牙と申せとあり天懸國懸と對て稱奉れる御名なり然るを天懸大神ハ地名の日前を以くとす
日前國懸兩大神の称起りより天懸大神の御名を
知る人なくあれる所を後世日前宮と稱奉り
て國懸宮をも兼ゆる稱となすも古に遺称
と又國造家傳るる曆應三年に欵状の草案
に謹考固實日前國懸之兩宮者天照皇神之前靈
也和光早卜南海之月崇敬年舊尊貌亦留北闕之
雲靈驗日新とんすれハ兩宮とも天照大御神に
幸靈におとす事ある也此文を證として
一鏡者天照大神之御靈とあるも前の字を補ふ
くや考ふ

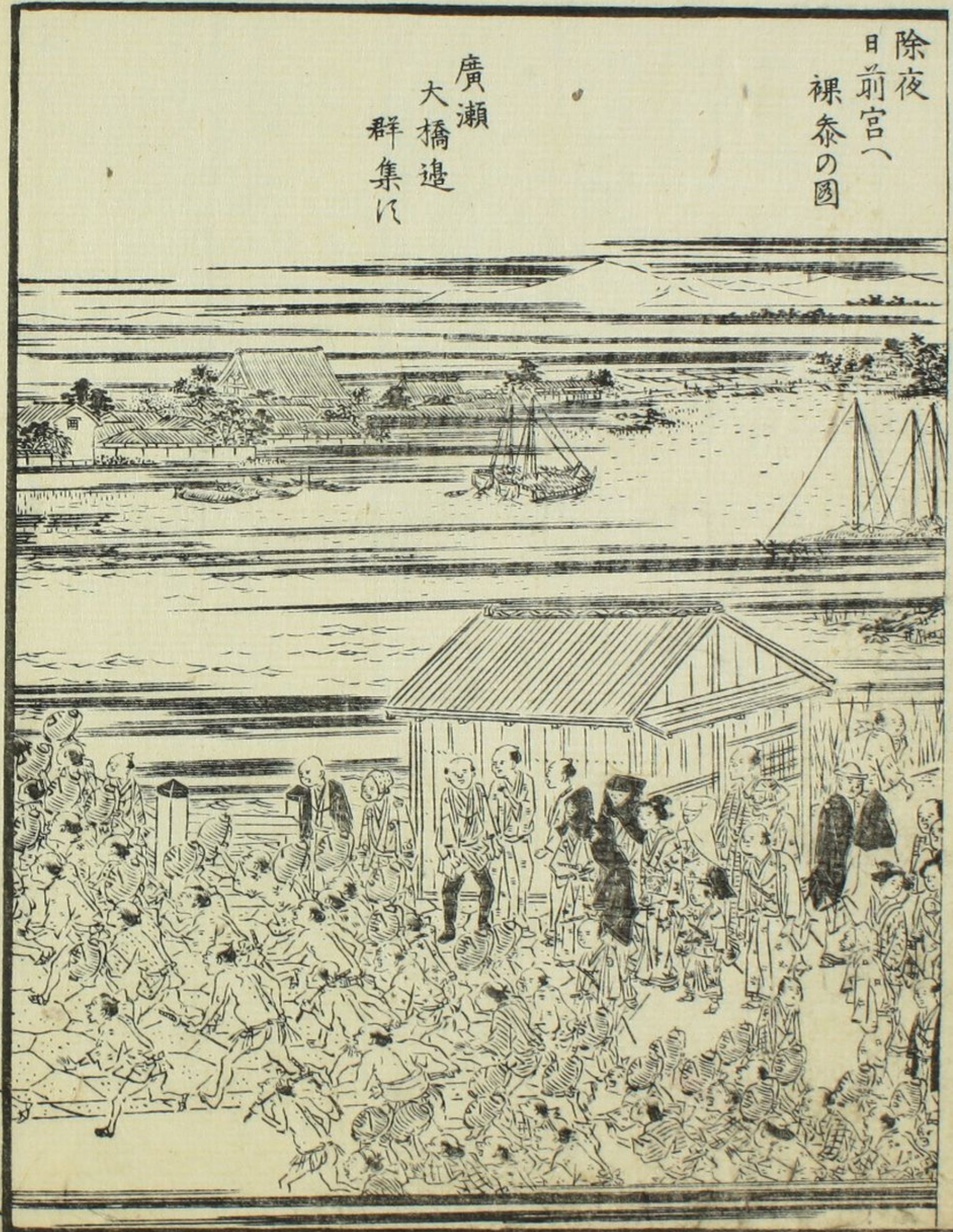


車坂
稻荷社
の圖



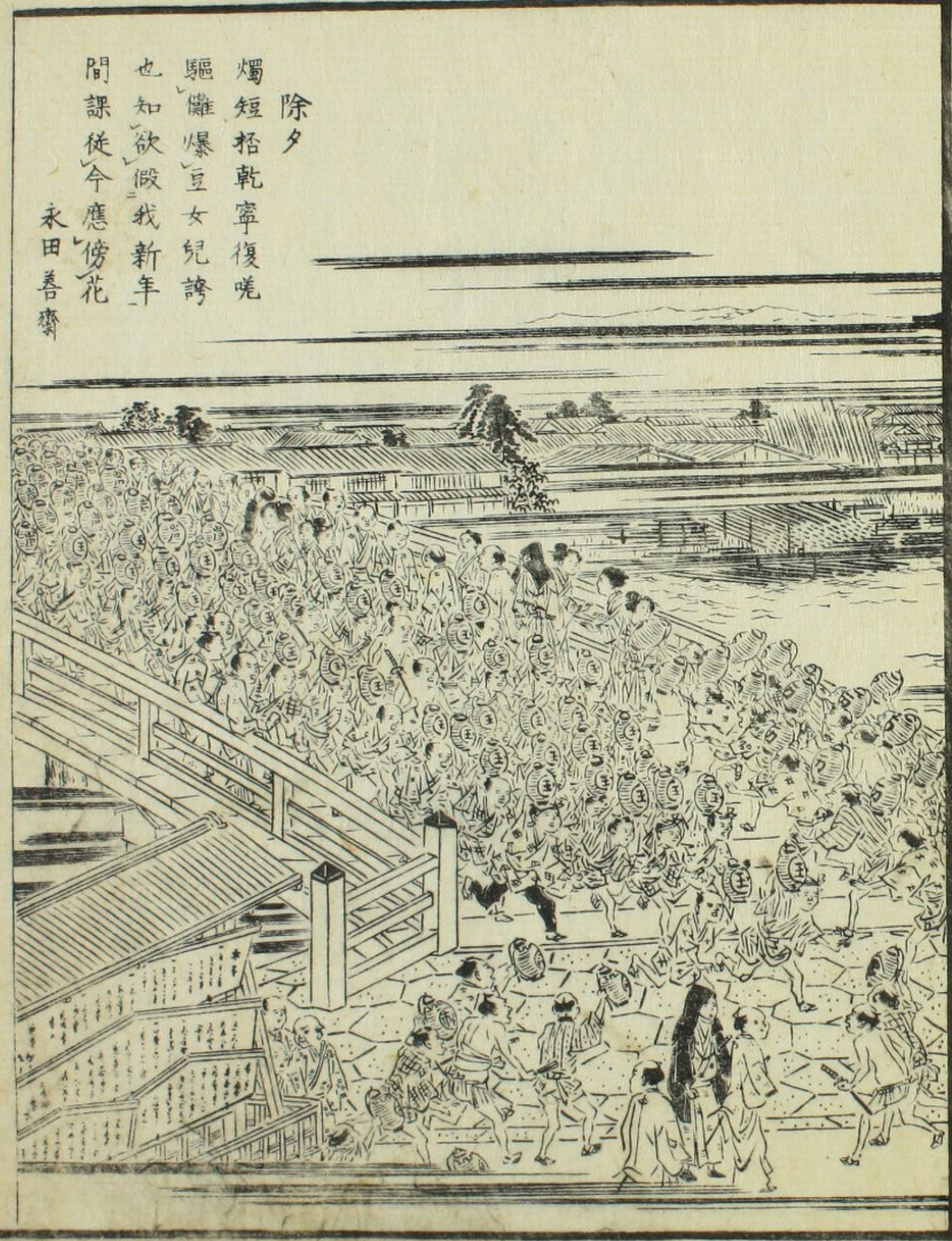
除夜
日前宮
裸参の図

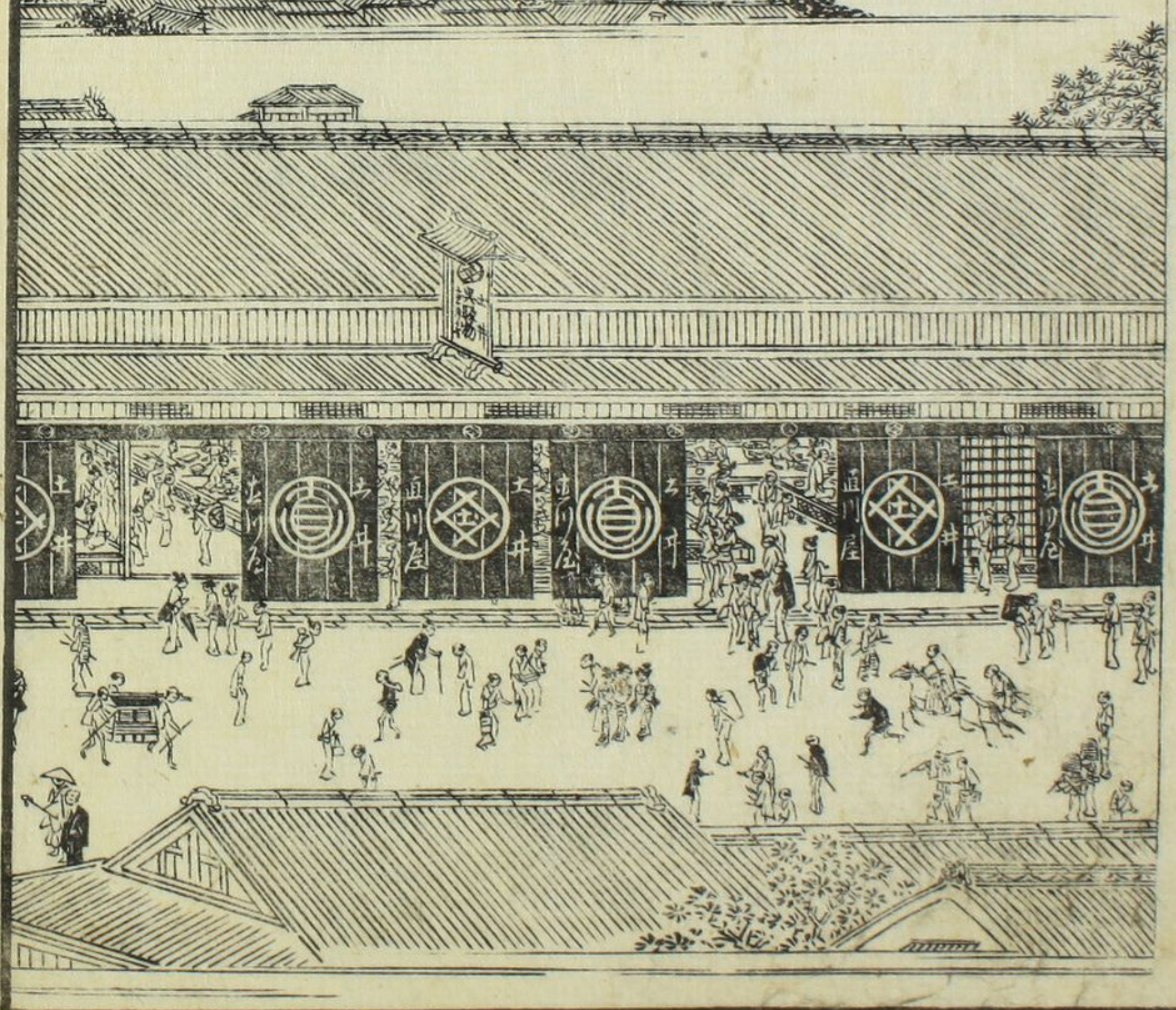
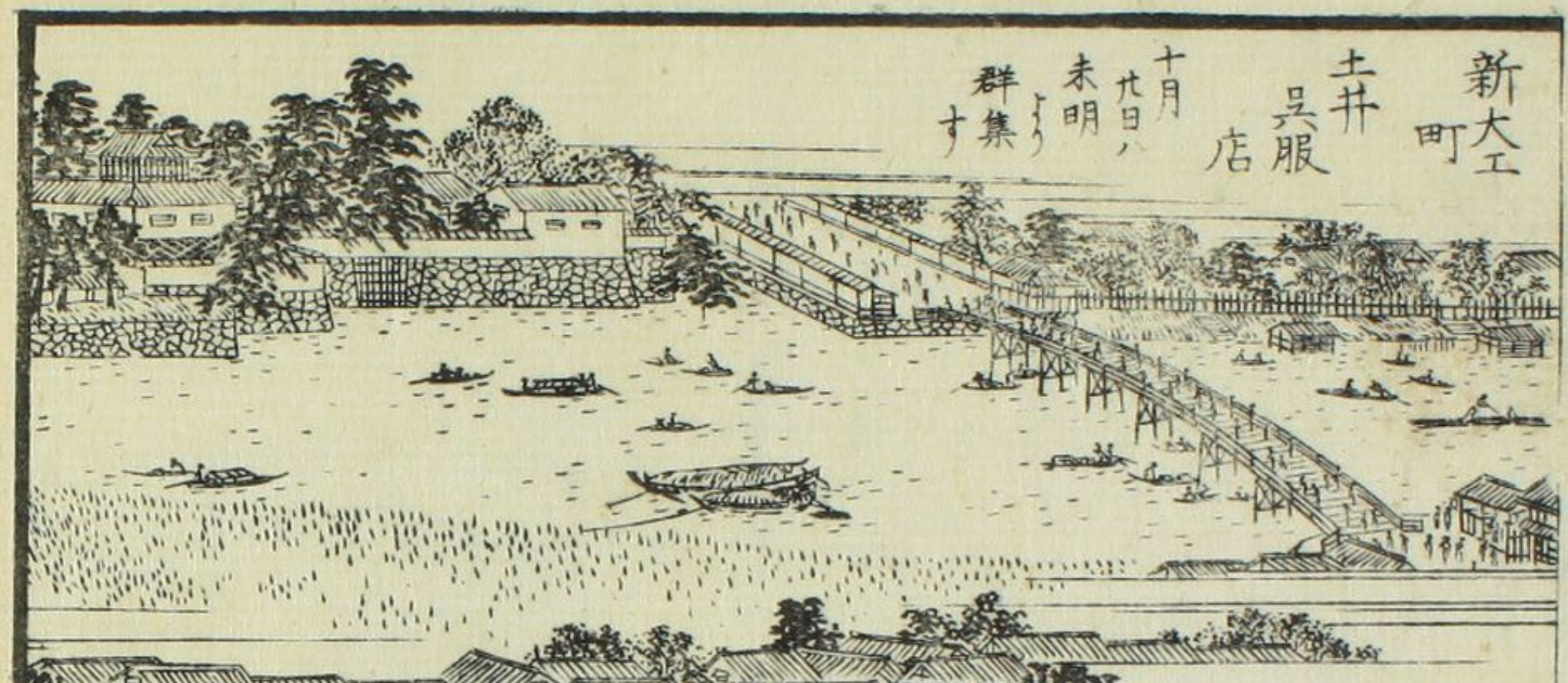
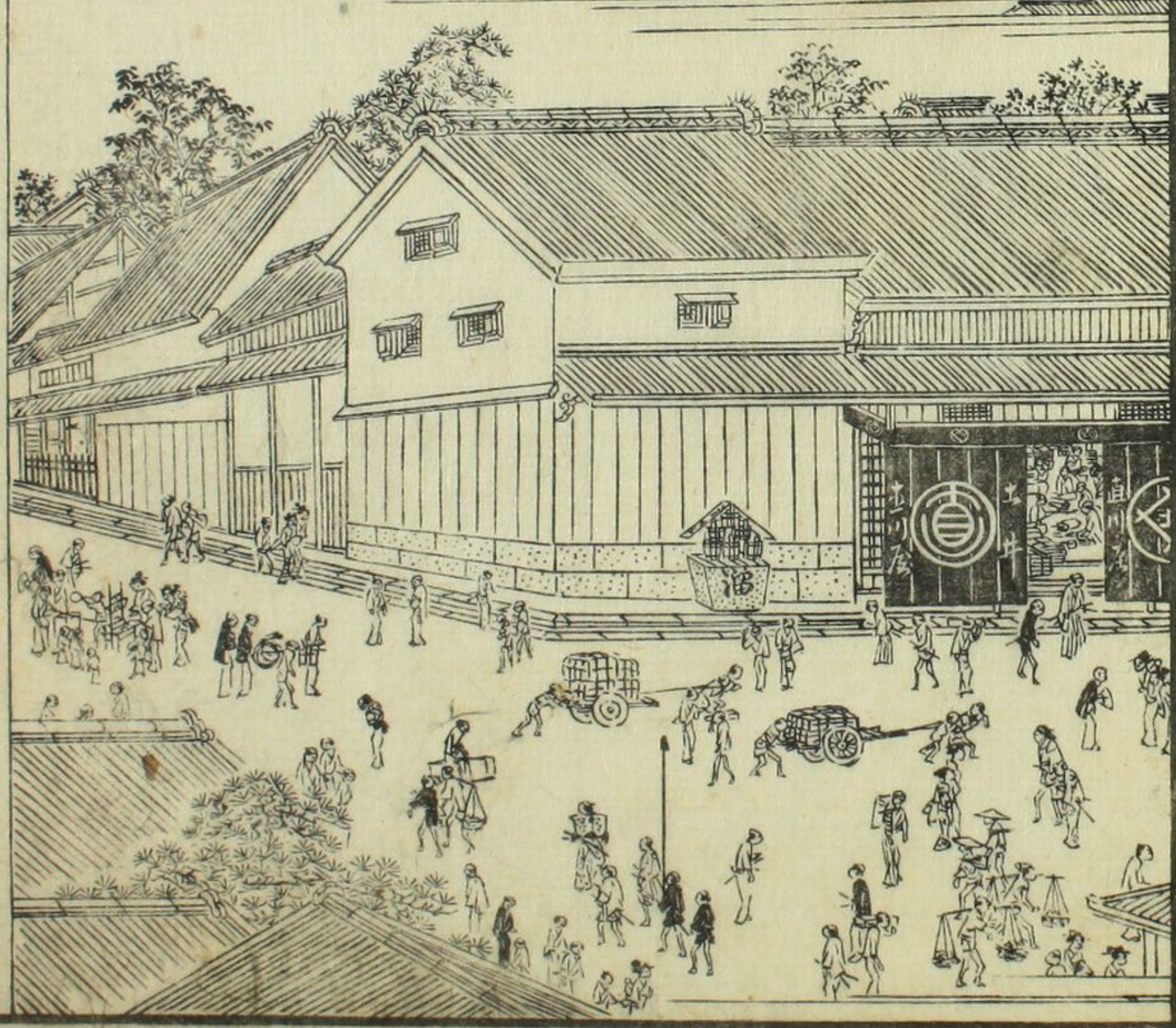
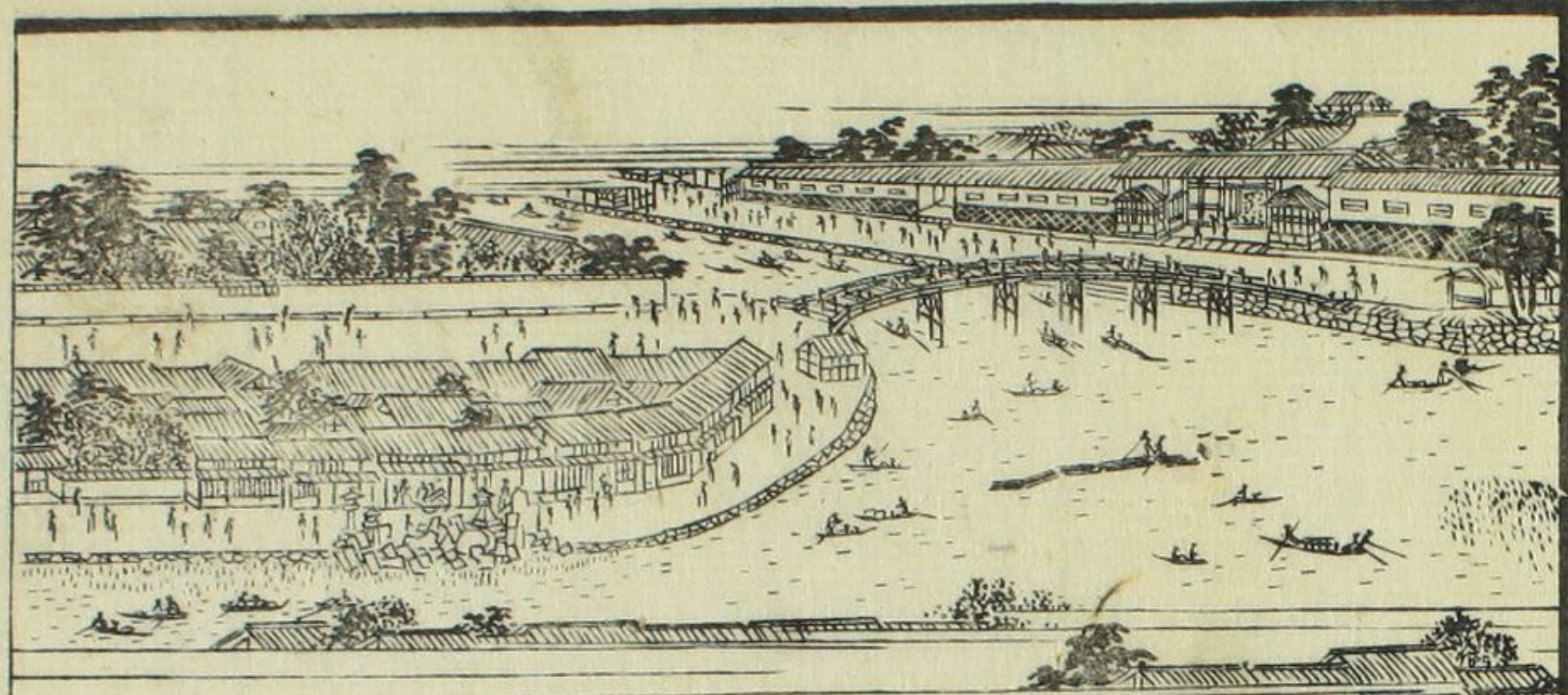
廣瀬
大橋邊
群集の図



赤
四
十五

除夕
燭短拵乾寧復暎
驅難爆豆女兒誇
也知欲假我新年
間課徒今應傍花
永田善齋





吳五官肖像

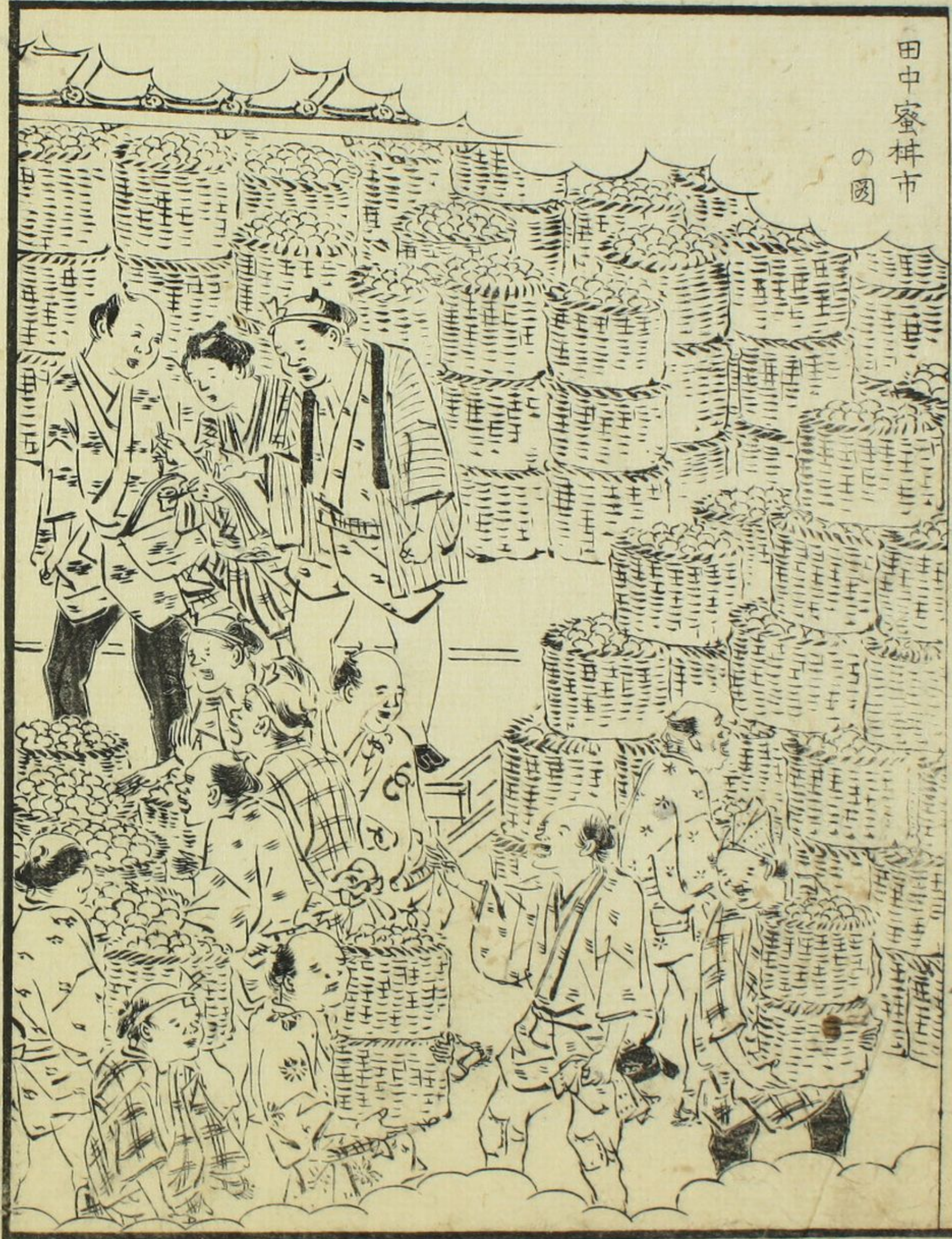
筆者詳ならず以明画の跡にて筆力凡あり以五官自ら其真を
寫せる像の上生年概畧を記するハ李梅溪の書と尺也此画
像奮執取村惣持寺の傳一ハ五官の碑大立寺小
在るを以て同寺に贈き其事は亦ハ五官の碑下文に尺也

吳五官名を任顯明の福建龍溪縣の人なり其遠祖ハ吳人
として名を真といふ也十八世の祖隨帝南征乃時從以來
て遂に世に龍溪に居る五官明末の亂を避るや崇禎五年
寛永九年六月廿一日出帆して皇國に赴んと途程中風波の
難あり幸に命を保ちて長崎に著る時年二十
七長崎に居る事四年小山角右衛門の女を娶りて妻は北
角清吉といふ也長崎より伴以來に官居地を賜りて田中の
園子に居る也今五官小路といふ
畧初編より尺也延寶六年正月廿四日年七十
三して没む田中大立寺に葬む其長男を吳傳次共赤
通古といふ後母の姓に改めて小山官記といふ明和頃ゆゑあり
て其家絶ゆといふ五官七十歳の時より
自小便を書きたる物あり





田中蜜柑市
の図



田中市 廣瀬大橋より東に達する町なり旧田疇の中は町家を建しより
 類殊多し蜜柑ハ本国の名産なり
 他は比類なし詳し在田郡の條より
 熊野路一里塚 橋向町より南に達するを屋町とす町の南端にあり府
 ありは彩富町を築
 きて後くうにす

本宮まで路程并驛所

- | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|-----|------|----|-----|----|------|
| 若山 | 一里半 | 内原 | 二里 | 加茂谷 | 一里半 | 宮原 | 一里半 | 湯浅 | 一里 |
| 井関 | 二里 | 原谷 | 二里 | 小松原 | 三里 | 印南 | 三里 | 南部 | 二里 |
| 田邊 | 二里 | 三栖 | 二里 | 芝 | 二十四丁 | 高原 | 二里 | 迹露 | 二十九丁 |
| 野中 | 四里 | 伏拜 | 一里 | 本宮 | | | | | |
- 以上驛路を中邊地といふ其中間
 田邊より分きて海濱の方よりゆく
 を大邊地といふ詳は田邊
 城下の條に記す

紀伊國名所圖會後編卷一終

